第６回　宗教と環境シンポジウム報告書
2016 年（平成 28 年）４月１日

第６回 宗教と環境シンポジウム
〈めぐみ〉への畏怖と感謝 ――神道的環境倫理の有効性――

竹村　牧男　東洋大学 学長／ RSE 代表
石井　研士　國學院大學　副学長／神道文化学部教授
櫻井　治男　皇學館大学特別教授
黒﨑　浩行　國學院大學　神道文化学部教授
田中　利典　金峯山修験本宗　総本山金峯山寺長臈
古沢　広祐　國學院大學　経済学部教授
岡本　享二　RSE 副代表

主催：宗教・研究者エコイニシアティブ（RSE）
共催：國學院大學 21 世紀研究教育計画委員会研究事業
「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」
（2015 年［平成 27］11 月 28 日　於　國學院大學 渋谷キャンパス常磐松ホール）

目　　次

開会ご挨拶　　宗教・研究者エコイニシアティブ代表　　竹村 牧男　　… 3

（代読　武田道生）

会場校ご挨拶　　國學院大學 副学長／神道文化学部教授　　石井 研士　　… 5

Ⅰ　基調講演 〈めぐみ〉への畏怖と感謝 ――神道的環境倫理の有効性――

皇學館大学特別教授　　櫻井 治男　　… 7

Ⅱ　パネル発表１　鎮守の森の防災拠点としての見直しと再生可能エネルギー導入

國學院大學　神道文化学部教授　　黒﨑 浩行　　… 17

パネル発表２　自然に善悪はない ――修験道の立場から

金峯山修験本宗　総本山金峯山寺長臈　　田中 利典　　… 22

パネル発表３　エコロジー的世界観と「人・自然・宇宙」曼荼羅

――「共存・共生」の視点から人類文明を問う

國學院大學　経済学部教授　　古沢 広祐　　… 26

Ⅲ　パネルディスカッション　――神道的環境倫理の有効性――

パネル発表者

モデレータ　國學院大學副学長　　石井 研士

助言者　皇學館大学特別教授　　櫻井 治男　　… 31

閉会ご挨拶　　宗教・研究者エコイニシアティブ副代表　　岡本 享二　　… 39

開 会 ご 挨 拶

宗教・研究者エコイニシアティブ
代表　竹村牧男（東洋大学学長）
［代読］武田道生（RSE 副代表）

ただいま司会の方からございましたように、東洋大学の学長でもある竹村先生は、イタリアで開かれております、東洋大学の開設者でもある井上円了の国際会議に出席のため、本日やむを得ず欠席いたします。先生が残していかれた、開会の挨拶文を代読させていただきます。

皆さんこんにちは。本日は環境問題のシンポジウムにご参集いただき、まことにありがとうございました。深く感謝を申し上げます。本日私ども、宗教・研究者エコイニシアティブは、國學院大学 21 世紀研究委員会、「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」研究事業との共催で、環境問題に関する、第６回宗教と環境シンポジウム、〈めぐみ〉への畏怖と感謝－神道の倫理の有効性－を開催する運びとなりました。國學院大学様には会場の貸出その他、種々のご協力を賜り、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

また本日基調講演を賜ります、皇學館大学の櫻井治男先生、並びにご発表いただきます、國學院大学の黒﨑浩行先生、金峯山修験本宗、総本山金峯寺長臈の田中利典先生、國學院大学の古沢広祐先生、およびパネルディスカッションのモデレーターをお務めいただく、國學院大学の石井研士先生に厚く御礼申し上げます。

主催者の一つ、私ども宗教・研究者エコイニシアティブは、宗教者と宗教分野、あるいは環境分野の研究者とが一緒になって、共に環境問題を考える団体です。なぜ宗教者が環境問題に関わるかといえば、宗教は私たちに恵まれている命を大切にしますが、環境問題は命を害し、損ねるものだからです。今日、環境問題がいかに深刻であるかは、皆さんも肌で感じているところと思います。

世界の多くの科学者が盛んに警鐘を鳴らしていることを、命の大切さに敏感な私ども宗教者が見逃すわけにはいきません。命を深い地平から生かし、霊性の働きを十全に発揮させることを旨とする宗教は、この深刻な問題の解決に真摯に取り組んでいくべきだと考えます。その意味では命を自然のままに謳歌する神道とゆかりのある、ここ國學院大学において、このようなシンポジウムを開催できますことには、まことに深い意味があることと思っております。

私ども宗教・研究者エコイニシアティブは、宗教者と研究者とが、自身の宗教的立場に固執することなく、他者の宗教的立場にも開かれた心で参加し、相互に協力、連系する組織です。その中で現在の環境危機を克服して、人と自然の調和を実現するための新しい文明原理を構築し、さらにはその文明原理に沿った、各種の具体的行動を実践することを目的としております。

また私どもとしては、長期的には地球環境の汚染、破壊を完全に治癒し、地球社会のサステナビリティを実現することを目標としています。こうした単に新たな文明原理を構築するのみならず、その文明原理を先取りした、しかも宗教性に裏付けられた具体的な活動を実際に推進し、宗教界全体と一般市民に本会のフィロソフィーを浸透させてまいりたいと考えております。そして、そのことを通じて、広範な市民のライフスタイルの変革をもたらし、地球社会のサステナビリティの確立を期していくことを目標としております。

その新しい文明原理を先取りした、具体的な、社会的な実践としては、特に古来、宗教と関係の深い太陽光利用の発電を重視して、エネルギー問題の解決に向けた行動に取り組んでいます。そこで、広く宗教界にこの運動への参加を呼びかけております。神道のいわば根源にある、天照大御神は、まさにこの太陽光エネルギーの恵みの根源であると思いますので、神道界にもこの運動に参加していただけたら幸甚です。

この他、日本に鎮守の森や寺院境内の林等の保全に関して、国内外の国土の緑の回復、拡充に取り組んでおります。合わせて、環境に関する他の様々な諸問題の具体的な改善に積極的に関与し、緑豊かで盛況な自然の形成を目指しています。こうした私たちの活動にどうかご理解いただき、積極的にご参加いただきたいと思いますし、また種々ご支

援いただきたいと存じております。

さて、本日のシンポジウムは私どもの活動において第６回となります。テーマは〈めぐみ〉への畏怖と感謝－神道的環境倫理の有効性－です。神道は私ども日本人の、魂のコアに存在しているものであり、その自然と一体化する中で日々を生きようとする精神は、今日の環境問題にも極めて有効なビジョンをもたらすことと考えます。日本古来の清浄、崇高な自然をこよなく尊ぶ神道の世界から、豊かな環境思想、エコフィロソフィーが生まれますことを、心より期待申し上げております。どうぞよろしくお願いします。

以上を持ちまして、甚だ簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

RSE 代表、竹村牧男。副代表、代読、武田道生。

会 場 校 ご 挨 拶

國學院大學 副学長／神道文化学部教授　石井研士

國學院大學の石井でございます。よろしくお願いいたします。宗教と環境シンポジウムの開催にあたりまして、開催校として一言ご挨拶申し上げさせていただきます。國學院大学は明治 15 年に開校された大学でございます。今現在は近代的な施設になっておりますが、133 年を迎えた大学でございます。

明治 15 年に皇典講究所として出発をいたしました。皇典講究所という名前自体は、皆様方はあまり馴染みがないかもしれません。皇典というのは、この国の古い古典籍、基本になるようなものを指しております。日本の古典を研究することで、我が国の元と申しますか、そうしたものを理解し、我々が依って立つところを明らかにすることを目的にしたものでございます。

皇典講究所が設立されました当時は、西洋の列強に追いつくべく、西洋の文明を吸収しようと一生懸命になっていた時期でございました。その結果、皆様もご存じのようになかなか本来は我が国のあり方になじまない、あるいは幾分か過度に過ぎた近代化というものを、我が国が摂取したように思います。こうした危機的な状況というものを強く感じた人たちが、皇典講究所というものを起こしました。

学長は挨拶などで、「明治時代のグローバリゼーションだったのではないか」というような言い方で理解をいただくようにしています。海外の価値観、あるいはさまざまな利便性の高いものが、次々と我々の日常生活の中に押し寄せて、我々は自分たちの生活の基本を忘れてそうしたものに飛びつき、生活を変えていく。その結果どうなるかということをあまり顧みない。そういう時代ではなかったのかというふうに申しております。

そうした國學院大学の建学の精神というのは、「神道精神である」というふうに言っております。ただ、神道精神と言いましても、なかなか近年は理解が難しいところがあります。本学では、学生さんたちに理解ができるように、こういう言い方をしております。「主体性を伴った、寛容と謙虚さの精神」という言い方をしております。実は四字熟語などで本学の理念をまとめることができれば、もう少し分かりやすいのですが、内容的に難しい表現になっています。主体性を持っていながら、寛容と謙虚さの精神も、きちんとわきまえていなければいけないのです。難しい表現ではございますが、実は我々日本人が長く持っていた生き方、価値観ではなかったのかと思っております。

皆様方、今日は道路のこちら側の建物にお入りいただいておりますけれども、道路を挟んだ反対側に、木々がかなり高い部分をご覧になったのではないかと思います。ちょうどあの部分に神殿が設けられております。國學院大学は、日本の中にあるたった二つの神道系の大学の一つでございます。もう一つは、今日基調講演をいただきます、櫻井治男先生が所属されている、伊勢神宮に隣接する皇學館大学でございます。國學院大学はそのもう一つの神道系の大学でございまして、神道系の学部としましては世界で唯一のものであります。神道文化学部はかなり多くのスタッフと学生さんを抱えております。

学生さんにどのような教育を行っているかについては、時間もありませんので申し上げませんが、基本的には我々が持っていた伝統的な価値観のみをよしとするのではなく、我々の足元を見据えながら主体的に考えて、どう発展させていくのかということを目指しております。神道に関しては、私の方が今申し上げられるような立場ではございません。本日はご専門の櫻井治男先生が基調講演をされますので、神道と自然観に関することに関しては、ぜひ先生のご講演をゆっくり拝聴させていただきたいと思います。

先ほどもございましたように、今後日本を含めた世界の諸国が、依然として持続可能なのかどうか、非常に危ぶまれるところでございます。そうしたことが分かっていながらなかなかとどまることができません。一体どうしたらいいのだろうか、日々考えてみているわけでございます。國學院大学は、プロジェクトを設けて取り組んでおります。今日も共催をさせていただいております、先ほどから名称が挙がっておりますが、「地域・渋谷から発信する共存社会の構築」というプロジェクトを大学で設けています。大学の大きな研究の柱として古沢先生、黒崎先生を始めとして従事していただき、ご提言、研究をお願いしているところでございます。今日はその先生方も含めて、國學院大学

は何を考えているのか、お聞きいただければ幸いでございます。今日のシンポジウムが実りあるものであることを祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

〈めぐみ〉への畏怖と感謝――神道的環境倫理の有効性

皇學館大学特別教授　櫻井治男

ただいまご紹介いただいた櫻井でございます。先ほど石井先生からここ國學院大學のキャンパス紹介がなされ、ちょうど道を挟んだ向かいに森があり、その中に神殿が設けられているというお話がございました。同じ神道系の大学で、私どもの大学は伊勢神宮の鎮座地にございますが、キャンパスの中には神殿というのは設けられておりません。どういうわけかと昔の方々にお伺いしますと、大学そのものがお伊勢さんに守られているから、神殿はいらないのだという考え方でいるとのことです。

確かに考えてみましたら、國學院と時を同じくして明治 15 年（1882）に大学のもとが設置されたのですが、言ってみれば神宮の森から生み出されたような大学でございます。そういう点では、あまりにも大きな森に、大きな力に支えられていることでございまして、身近なところで、いろいろな課題があることに、普段は気づかないようなところがございます。今日はそうしたことを含めまして、この「〈めぐみ〉への畏怖と感謝」というタイトルのもとで、一つのポイントとしては小さな気付き、その気付きが大きなつながりというものを作ることによって、今日的課題に向き合えるのではないかということをお話できればと思っております。

最初にスライド（図１）を見ていただきたいと思います。伊勢へおいでいただいた方は多いだろうかと思いますが、4 点の写真でございます。私も家から歩いて 15 分ぐらいのところですので、何か気になることがあると様子うかがいに出かけるようにしています。何かあればと言えば失礼ですが、台風の後や雪が降った時など出かけるようにしているのです。左の上の写真、これは皆様方にとっても伊勢らしいとご覧になるところではないかと思うのです。撮影した場所は内宮の宇治橋の真ん中あたりからです。下を流れる五十鈴川の上流部分の光景です。手前に見える杭は、ご承知のように宇治橋は木造ですから、橋脚を流木から守るため、あるいは川の流れを分けるために、頑丈な欅（けやき）の料材で作られているわけです。普段はこのように穏やかに水が流れている。心が洗われると言いますか、非常に麗しい感じをおぼえるところでございます。

図１

ところがその一方で、右側の写真２枚なのですが、これも最近もこうした状況が起こったのですが、よりインパクトがあると思いまして、以前に撮影した写真を掲げました。この時は、わずか１～２時間、雨が降ったときの様子です。集中豪雨でして、これだけの暴れ川になります。水が、橋桁の下の方まで来ております。さらに下段の写真は、宇治橋の下流域、皆様方にはおなじみの、伊勢名物のお餅屋があるのですが、その餅屋さんの本店のごく近くです。そこへは川幅一杯に水が広がって参りまして、家の際まで来ており、普段は河川敷は駐車場になっておりますけれども、すっかりその場所が水で覆われるという状況でございます。

そして、左下の写真ですが、これは平成 25 年、すなわち今から２年前の８月、神宮の式年遷宮の時のもので、私ども伊勢市民は遷宮行事にご奉仕ということで、白い石を持って神宮へ納めに参ります。「お白石持（しらいしもち）」と申していますが、そのときに、内宮側の各町は、五十鈴川の中を、樽に入れた白石を、橇（そり）に載せて引っ張るのですが、水がとても少ない状況がしばらく続きました。そうしますと、伝統的な作法で行事を実施することが難しくなるのですが、幸いに、まだ行事期間中は、なんとか水がございました。ところがその年の夏は猛暑で、行事が終わりましたとたん、非常に乾燥しまして、川が干上がり、右上の写真と比べていただくと、そちらは水面を見ることができますけれども、この水面の先が内宮の御手洗（みたらし）場といって、手と口を漱（すす）ぐ場所ですが、右下写真のように、その先まで枯れるという状

況でした。

ご承知のように、伊勢神宮の森は 5,500 ヘクタールあります。その中を川が二本流れており、内宮の正宮付近で合流しているのですが、上流にダムは設けられておりません。森全体が水を湛(たた)え、あるいは森によってこの川が自然に流れる姿が保たれております。それは非常に穏やかな面を持ちますが、一方では写真でお示ししたように激流や干上りともなる厳しい面という、2 つの相異なる面を常に持っているのです。こうした状況が、私たちの身近なところにはいつもあるのだと思っております。

さて、本日のサブタイトルは、神道的な環境倫理の有効性ということでございます。神道が環境問題に関わっていくという実践的な問題でもあります。神道が意識的に、あるいは世の中のいろいろな状況の中で、環境問題を主体的に捉えるきっかけというのは、以前からございますが、近年の状況を私なりに少し振り返ってみたいと思っております。そのために、スライド（図２）に出しました 2 つのシンポジウムのことから始めさせていただこうと思います。

図２

一つは今から 20 数年前に、「千年の森シンポジウム」というタイトルを付けたシンポジウムがございました。もう一つは海外で、「神道とエコロジー」というシンポジウムが行われたことについてです。最初に、「千年の森シンポジウム」のことを振り返ってみたいと思います。先ほどから、「持続可能」という言葉が出ておりましたが、1992 年、平成 4 年ですが、ブラジルのリオデジャネイロで地球環境サミットが行われたのですが、そのときのキーワードの一つが、「持続可能な開発」ということでした。

そこで主張されたことは、私たちが持っている環境資源、この利活用を図る上で、現在の自分たちのニーズ、これも満たしながら、しかし次世代の人々へのニーズを損なわないようにする。そういう点で持続可能という問題が捉えられたとうかがっています。持続可能性という観点は、私たちが今受けている恩恵は、実は将来のために託されているのだという考え方とともに、自分たちのニーズをどう満たしていくかという問題と関わっています。現実に保存と開発の問題解決は、世界的な状況の中では難しさがあろうかと思います。自分たちも満足できるよう、しかし将来へのニーズを損なわないようにというのはある意味で、矛盾とは申しませんが、対立する難しい課題を抱えているのだろうと思います。

こうした議論が地球レベルの問題として行われる中で、このリオのサミットを意識し、神社界においても、こうした点を踏まえて、積極的に環境問題に関わっていく、あるいはこの問題を意識的に議論していくという動きがあらためて出て参りました。その一つが、平成 6 年（1994）、全国神社の連合組織である神社本庁が深く関わりを持って行いました、「千年の森シンポジウム」でございます。大会の委員長は佐藤大七郎先生なので、神職さんというわけではなく、広い立場で環境問題を捉えられている先生が代表となられました。催しは 3 日間、伊勢で平成 6 年、すなわち前回の遷宮、第 61 回の遷宮の翌年に行われたところに一つの特徴を持っております。

このシンポジウムで指摘されたこと、あるいは意識されていたことは、お手元にお配りしております資料に少し紹介をいたしました。一つは、現在の私たちが、自然への畏敬という点を忘れているのではないかということを、強く意識されている点であろうかと思います。そしてもう一つは、環境問題についての対話が必要であるということ。それは内部にいる側だけの対話ではなくて､外との対話という点が必要になっていると認識されている点でございます。3 日間のプログラムや行われた内容については、表紙を掲げました報告書の中に収められておりますが、私もこのときに参加して感じましたことは、大会ではシンポジウムや各種の講演、あるいは映像の上映等がございましたが、一つ大事に思っておりますのは、子供たちと共に、さまざまな環境に触れ合う機会を持ち、また環境のことを具体的に考えていく、そういうワークショップが開かれたことではなかったかと思っています。すなわち、次の世代を担っていく子供たちが、具体的に木であれば、木そのものものを手で触る。あるいは檜(ひのき)の料材であればそれを用いて何かを作り上げていく。このような体験の大切さをプログラム化されていたことであろうかと思います。そうした点で、私はこのシンポジウムの持っていた意義というのが、自覚的に神道、神社界が中心になって行われたことと、それが伊

勢で行われたという点に重要性があったかと思います。

大会では、「伊勢宣言」が発表されました。その内容は、神話の中に登場する天照大御神とその弟神のスサノオノミコトが、太陽と水という両面を司る神々として協力しあって、この地への豊穣の恵みを示しているのだということを見つめるという点です。そうした神話的な理念、そこで示されていることを踏まえつつ、現実の社会の中では、森林に対するこれまでの見方の転換を促すこと、また経済的な合理主義がはびこることに対しての、いわば文明批評というものが行われました。根本的に大切なことは、これまで守り伝えられてきた神の森への畏敬観の覚醒、宗教的な観念が非合理的であるとして退けられてきた、そういうことへの反省が大きな課題ではないかと指摘されたところでございます。

伊勢宣言が出されまして、それが世の中にどの程度広く影響を与えたかということまで、私自身は検証をしておりません。むしろこうしたことが行われていたということさえ、ご存じない方も多いのではないかと思います。そうした点では、ここでの活動が大きな影響を与える転機となるとか、波紋を広げるということでは必ずしもないかもしれません。しかし環境問題というものは、継続的に持続的に捉え、課題解決に向けて宗教間の対話を続けていくことの重要さを表明したという点は、神社界、神道界のスタンスを明確にしたことであるかと思います。

お手元の資料には紹介いたしませんでしたが、平成 25 年、2 年前に行われました第 62 回の式年遷宮記念事業として神社本庁と、それから ARC（Alliance of Religions and Conservation）という世界宗教者環境保全連盟がございますが、一緒になって、伊勢で環境問題に関するシンポジウムが行われました。ここには彬子女王（あきこじょおう）、高野山真言宗の松長有慶管長先生がおいでになって、基調発題をされました。そこでも同じように、自然の大切さ、神道の自然観の意義、重要性さが確認されました。

このシンポジウムが国際会議であり、英国王室からのメッセージが寄せられるなど、神社界の取り組みとしてグローバル社会における展開となりました。少し残念だったかなと思いますのは、20 年前になされた、次世代の子供たちと共にというような試みは必ずしも行われずに、クローズドされた大会という点であったかなと思われます。もちろん神社界も鎮守の森を場として、子供を巻き込む活動をそれぞれなさっていますから、こうした大会が中央レベルで開催されたことは本当に大切ですし、内容的に豊かでありました。こうしてなされた大会の意義を、今後どのように活動の広がりへと発展させるか、また深刻化する課題への向き合いかた、また、そうした場をどのようにしつらえていくかということが重要かと思います。

さて、また 20 数年前の第 61 回式年遷宮のことに移りたいと思います。この時期のマスコミの報道を見ており気になることがございました。遷宮という祭事、これは 20 年に一度、神々をおまつりする建物を新しくするのですが、多くの建物が建て替えられます。神様のお使いになる調度品類、御装束神宝と申し上げるのですが、それらも全て新調して奉られるということが、強調して紹介されるところがございます。

そうなりますと、あれだけの大きな木造の建物です。基本的には全て檜で造られているわけですが、檜の新材を使って、そして古い建物、「まだこれは耐久面からみても、リペアして使えばもつのではないか。それなのに建て替えるというのは無駄遣いではないか」という、一部マスコミやメディアの批判的見方もございました。

あるいはそれに合わせて、その当時無駄遣いという観点から、日本人が割り箸を使っていることへの無駄遣いということも併せて話題にあがりました。それでは、「マイ箸」を持って料理屋さんに行ったときにはそれを使おうという試みもなされておりましたかと思います。もちろん現在も実践していらっしゃる方もおられますが、あの 20 数年前のマイ箸ブームというものが、いつのまにか記憶の彼方にいってしまったようなことがないだろうかと思います。批判については、それ以外に日本が海外から大量の木材を輸入している、あるいは熱帯雨林の大量伐採に関わっており、日本に問題があるという指摘が、海外での環境シンポジウムへ出かけた経験からしますと良く取り上げられる指摘でした。神道が自然を大切にする宗教であることは分かったが、日本人はその神道を捨て去ったのではないかとの発言もなされるところでございます。

遷宮のことをもう一度振り返ってみますと、遷宮後の建物や料材は、現代的に言えば再利用、リユースされている。再利用と言いましても、他の神社の社殿として移されるとか、あるいは近時の場合ですと、東日本大震災後の復興をされているお社にお渡しされるという方法が採られています。そういうことでは、全く無駄な古材として捨てられるわけではないという点です。

それからもう一つは、もっと大きな面から問題を捉え返そうということで、神宮の森に改めて目が向けられるよう

になりました。すなわち神宮の森が、植樹と育成、そして利用という循環的なサイクルの中で維持されてきているという事実から学ぼうという点であろうかと思います。今から 100 年程前、大正時代の終わり頃に、神宮では、200 年、300 年先を見据えた森林計画というものが策定されております。その内容は、宮域を神域林と宮域林とに区分し、神域はいわゆる神の森として、神宮としてふさわしい環境を保持することです。ご社殿の建つ周囲は、生木の伐採を絶対行わないということで、鬱蒼としたなかに参道が続くわけです。宮域林は 2 区分され、第一宮域林は神域の周囲、宇治橋付近などですが、先ほど見ていただいた、五十鈴川の周辺の木々は多様で自然な状況が見られますが、風致の増進が図られ、必要な管理がなされています。もちろん大風が来たら倒れたりします。それは取り除きますが、景観・環境保全につとめられています。このような森厳で風致の良き状態を守る観点が一つです。

第二宮域林は、五十鈴川の水源涵養、宮域の風致増進を目的としますが、檜を主木に針濶混淆林（しんかつこんこうりん）、すなわち針葉樹と広葉樹の混ざる森づくりです。檜が主木となっているのは、将来の遷宮のために、社殿の良材として計画的に育てていこうという考え方です。すなわち木を切って植える、そして育て切るという、長い時間的スパンのなかで、循環の考え方が採られています。この長いスパンでの森の管理は、数世代先に結果が委ねられるわけですから、海外からも注目されます。第二宮域林のなかには、伊勢湾台風後に全く手を触れず、原生林的な状況で置かれ、それがどのような変化を起こしていくのかを実験的に観察する箇所もあると聞いていますが、このような考えで、神宮の森の維持が現在に至っているわけです。

こうした神宮の状況を改めて見ますと、森の仕組みというのは、神宮だけではなくて、小さなお社においても、やはり地域の方々がそのような考え方のもとで、鎮守の森を守ってこられた、そうした姿を見ることが往々にしてあります。逆に言えば、森づくりは、神宮だけではなく、規模の大小はありましょうが、これまで地域ごとのお社が紡いできたあり方ではなかったのかと思います。それが神宮に象徴化的に現れているのでしょうね。

ただ、その背景で一つ注視しておかなければならない点は、先ほど申し上げましたように社殿を建てる、そして 20 年たてばその社殿をすっかり新しくする、そして古い社殿を取り壊すのです。それはなぜかと言うと、古くなってくると見た目にもあまり良くないだろうし、いつまでもそうした状況で置いておくというのは、かえって危険で不都合であろうという、こういう意識も働いたのかなと思います。

ところが、神宮の社殿の取り扱いの歴史を見ますと、必ずしも 20 年たってすぐにそれまでの社殿を撤去するという状況ではなかったのです。むしろ古代的な仕組みで言えば、社殿の建設は 3 年でやっており、古殿はそのまま、合計しますと 37 年間おかれていたわけです。すなわち、新しい社殿と古い社殿が併置されているという状況が、長いこと続いておりました。

ここには、古くなったから、薄汚れている、朽ちると危険である、撤去しておかなければという、ある意味では「神聖性」についての合理的な考え方による判断が生じているのではないのかと思います。もっと古い時代の考えに戻れば、一度神のものとして使われたものは、人間が手を触れないという。もちろん建物ということでは加工をしてありますけれども、そうした用途で使われたものは、できるだけ人間が関わらない、手を触れないということで、神聖さが保たれ続けるという考え方が一方ではあったのではないかと思うところです。

さて、次に紹介しますのがこのスライド（図２）の右に示しました、ハーバード大学でのシンポジウムです。大学の世界宗教研究所というところが、世界のいろいろな宗教の環境問題についての取り組みや考え方というものを知ろうということで行われたものです。神道をテーマとしたのは 3 回目のシンポジウムであったかと思います。これについても神社本庁が関わって参画する、すなわち世界にそうした神道の自然観を発信していくことに積極的でありましたので、このような試みもあったのだということで紹介しておきたいと思います。

そしてもう一つは、神道だけではなくて、神々の森、また小さな祠で祀られているところにも森があり、あるいは寺院にも森があり、さらに日本の山岳の行場、修験の場には豊かな森があります。こうした森や樹相全体を「社叢」という概念で捉えて、自然だけではなく、その歴史的、文化的な内容を明らかにしていく。環境の研究者、あるいは植生の研究者、芸能研究の人たち、神職さんなどいろいろな方々が関わりあって、一つの組織を立ち上げられたのが、社叢学会です。

学会は、平成 14 年（2002）に設立されたのですが、設立当初から力を尽くしておられるのが、埼玉県の秩父神社の薗田稔宮司です。薗田先生は、これまで、「千年の森シンポジウム」、あるいはハーバードのシンポジウムを含め、

図３

図４

社叢学会へ神職として、そして研究者として関わってこられました。そうした方々がいらっしゃることで、この神社、神道に関しても、環境問題への関心というものが継続的に保ち得てきたのではないかと思うところでございます。

さて、森をめぐる問題、今この例だけを挙げましたが、それ以外にも小規模かもしれませんが、地域ごとで鎮守の森を見直そうとか、あるいは森について学ぼうという動きはございます。それは古くからある森だけではなくて、この大学のお隣にございます明治神宮の森、新しく創出された森ではございますが、100 年たってどのような状況になっているか、その当初のプランニングとの関係など、改めて検証をされるように、森づくりが、決して古いものを維持するだけではなくて、新しい創造という点でも、神社界において重要な意識内容となっていることを紹介しておきたいと思います。

次に２点目の、「自然への恐れと恵み」という問題に入らせていただきます。スライド（図３）は、伊勢神宮の近くの朝熊（あさま）山の山頂から、神宮林を見渡した光景です。向こうの方に光って見えるのは志摩の海です。手前、右下で一部示しましたが、檜林の間から光が差している様子です。こうした森を神宮の営林部の方々が日々管理をされているのです。森は、人間の生活にとっても時には辛いところがあります。なぜかと言いますと、森にはイノシシと猿、鹿がたくさん住んでおりまして、人里へ出てきていろいろなものを食べます。そこで追おうとすると、巨大な森へ逃げていきます。森は鳥獣魚類の保護区になっておりますから、そうした動物や生き物といかに共に生きるかという課題は常に抱えているところです。

それから、次にお示ししたスライド（図４）は、明治の終わり頃に撮影された内宮のそばの山なのです。現在この辺りの裾野の一部は開発されておりますが、随分と禿山です。少しずつ木が育って来ている様子もうかがえますが、写真右手の辺りは育ってはいません。どういうことかといいますと、かつてこの山や神宮の宮域林は、薪炭材資源地として活用されていたのです。村の入会山、あるいは民有地になっていた土地があり、後には、神宮の方で奉納を受けるという形で編入を行われたり、民有地との関係に苦心をされ、宮域林の維持を考えてこられました。明治期の、まだ痛々しい山の姿に対して、現在では山も復元されてきております（図５）。単一樹による植林というよりは、自然の状況の中で生え育ってきたのですが、現在でも山の様子を見ますと樹相に境目が認められます。百数十年前から気をつけて来られたのだろうと思いますが、現在では森として回復されているのです。長い時間がかかっていると言えます。

図５

それから先ほど３つ目で、社叢学会を紹介しましたが、このスライド（図６、次頁）の左写真はごく最近のニュースレターです。震災地での調査や社叢復興への活動をやっていらっしゃるわけです。右の写真は、銀杏の落ち葉が絨毯を敷き詰めたようになっていますが、名張市のお宮の光

図６

景です。基本的にはここに示しましたような、地域ごとにお宮の森があり、それを大切にして、氏子さんなど地域の人達が維持してこられた姿があり、このことがそれぞれの地域で自然環境を守る役割を果たしてきたと言えるかと思います。

さて、「自然への恐れと恵み」という話題ですが、特に平成 23 年（2011）3 月 11 日の東日本大震災、それから以降、自然災害に対しての関心が高まっております。一方、時間の経過とともに風化するのではないかという、そういう心配もあります。神道研究の方では、例えば本学の岡田荘司先生らが、古代国家にける災害と祭祀という点で、改めてその背後にある考え方などを照射し、歴史的な状況を検証されています。また、黒﨑先生も継続的に被災地を訪れ、現状把握と宗教の社会貢献の観点から研究をお進めです。現在の日本人の態度や、あるいは災害に対して、またそうした現実に直面する問題に対しての意識というものを、議論し合う機会もあろうかと思います。

そうした場合に、どちらかといえば神道においては、自然の恵みを受けてきた、それへの感謝が大きいのだとして発信されてまいりました。その点は、もちろん重要なポイントであろうかと思います。言葉としては「サチ」ということへの希求というもの、そうした点が、神社でのお祭りの主旨として願われます。一番端的なのは、秋の祭りなどで、豊作に対して、「さいわい」であり感謝であると。サチは「幸」という文字を用いますが、この言葉は、日本古代語としては、「獲物をとる道具」という意味もございます。海幸彦、山幸彦の幸がそれですね。それからもう一つ忘れてはならないのは、サチの語が「心の満足」という意味で古語でも用いられていたという点であろうかと思います。

そうしたことを踏まえながら、日本の古典のいくつかを紐解いてみますと、確かに祈年祭というお祭り一つを取り上げても、これから十分に秋の実りが得られるようにという、そういう願いを込めた祭りが行われるのです。その古代的な祭祀の祝詞の中には、風の神や水の神に対する祈りの儀礼がございました。具体的には広瀬の大忌の祭りや、龍田の神風、風神の祭りなのですが、その祝詞の中を見ますと、もう一度自然に対する考え方、捉え方というものが浮かび上がるのではないかと思います。スライド（図７）にお示ししたのがその一節です。

図７

これは広瀬の川合に座す神に対してこのように言っているのですが、広瀬とは奈良県の法隆寺近くの地名で大和盆地の河川が合流する「川合」の地です。２行目から見ますと、山々の口から狭久那多利（さくなだり）、すなわち勢いよくという意味ですが、お下しになるこの水を「甘き水」と受け止める。そして人々が作る御歳（みとし）、これは稲のことです。稲が十分に実っていくように。だから悪しき風や、「荒き水」に遭わせないようにお願いしますと。すなわち、「甘き水」と「荒き水」という対比、この両面がいつも水に見られるのです。この場合の「甘き」というのはスイートではなくて、非常に「穏やかな水」という意味です。そうした両面を水に感じ、自分たちはその頂く水そのものを「甘き水」として捉えるのです。そしてどうか「荒き水」に襲われないようにと願う。基本的には自然のもたらす水への受動的な態度ですが、熱心な祈りが捧げられていることが分かります。

このように環境という観点で見ますと、神道の儀礼の場で申し上げられる言葉の中には、意外にいろいろなヒントが入っているのではないかと思うのです。そうした点で、私自身は大祓詞に注目をしております。大祓というのは、年に２度、これまでの罪や穢れを祓うという祓浄儀礼なのですが、その唱え詞として次のような内容のことが述べられます。すなわち、普段、私たちが過ごしている穏やかな状況の中では人間が意識的に、あるいは無意識的に罪穢れというものを犯している。そういう状況では、どのようにこのことに対処するのかという点で、儀礼的には祓物（はらえつもの）

というものを差し出します。そして儀礼を行うことによって、罪穢れを神々が受け持って運搬され、そして最終的には根の国、底の国にいらっしゃる速佐須良比売という神が、それらを霧散させてくださるのだということになっています。そのプロセスを図でお示したスライド（図８）です。

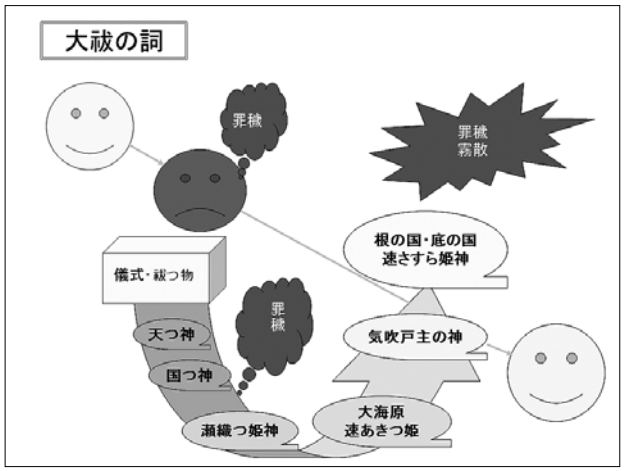


図８

この図を見て、いったい罪穢れは、最終的にはどこに行くのかと尋ねられると、私も「そこまでは示されていません」としか言いようがないのですが、罪穢れの搬送というプロセスが重要かと思います。罪穢れは先ほど申しましたように、人間が意識的にも無意識的にも犯してしまいます。それを、あたかも水が山から川、そして海へと流れるように、それぞれの領域を担当される自然の神々の力によって祓われ続けるのだという考えです。神々が受け持ってくださってこそ、その罪穢れがなくなるのだという考え方なのです。

私は、この詞の中では、人間が犯す事柄、あるいは人間の行動を常に自然環境の中で捉えなければいけないという、そうした考え方を示しているように思うところです。論理的に突き詰めれば、先ほど申しましたように、罪の行方について、責任感がないように思われます。それは責任感と言う前に、こうした自然によって、私たちの犯す罪というものが除去されるということは、逆に人間の行動のあり方が、常に自然環境を前提にして考えておかなければならない、責任を負っていると捉え返してはいかがでしょうか。私たちの生活やもろもろの行為に対して、大祓の詞が環境倫理という点で警鐘を鳴らしうるところがあるのではないかと考える次第です。

このような観点は、例えば神道の方で大事にされております古事記という古典、スライド（図９）に示しました古事記冒頭に、自然の神々が生まれるという話題が出てまいります。その一節を引用しておきました。少し太字で示した箇所です。例えば海の神とか、それから２つ目は湊の神、あるいは水分の神などです。水分というのは山から里へ水が流れていく、その分水のところの神です。あるいは風の神、木の神、それから山の神、野の神です。もちろん谷の神などがあるのですが。このように、海からずっと山へかけて、それぞれの領域の神々、それを伊邪那岐（イザナギ）、伊邪那美（イザナミ）の２神が産んでいったのです。

古事記上巻・神生み

既に国を生み竟へて更に神を生みき。故れ、生みませる神の名は、大事忍男神、次に石土毘古神を生み、次に石巣比売神を生み、次に大戸日別神を生み、次に天之吹男神を生み、次に大屋毘古神を生み、次に風木津別之男神を生み、

次に**海神**、名は大綿津見神を生み、次に**水戸神**、名は速秋津日子神、次に妹速秋津比売神を生みき。此の速秋津日子、妹速秋津比売の二柱の神、**海河**に因りて持ち別けて、生みませる神の名は、沫那藝神、次に沫那美神、次に頬那藝神、次に頬那美神、次に天之**水分神**、次に国之水分神、次に天之久比奢母智神、次に国之久比奢母智神、次に**風神**、名は志那都比古神を生み、次に**木神**、名は久久能智神、次に**山神**、大山津見神を生み、次に**野神**、名は鹿屋野比売神を生みき。亦の名は野椎神と謂ふ。

此大山津見神、野椎神の二柱の神、**山野**に因りて持ち別けて、生める神の名は、天之狭土神、国之狭土神、天之狭霧神、次に国之狭霧神、次に天之闇戸神、次に国之闇戸神、次に大戸惑子神、次に天戸惑女神。

次に大宜都比売神を生みき。

＊本文は岩波古典大系『古事記』、倉野憲司校注を用いた。

図９

神々を産むという行為によって自然が存在しているということは、自然という大くくりではなく、個々のパーツがつながりを持ってこそ、尊い神聖な存在であるという意識を示しているように思います。このことが、あの大祓という言葉で私ども人間の罪穢れというものがどのように除去されるかということと、深く関係し合うところだろうと思います。

最後に神社と３つの資源という点を申し上げておきたいと思います。神道とは何かという概念の問題はよく議論されるのですが、神道を捉えるときの内容として、私自身は、神社、祭祀、神道的な思想、それからもう一つは神道的な生活というように４つの領域で捉えるのが、分かりやすいかと思っております。

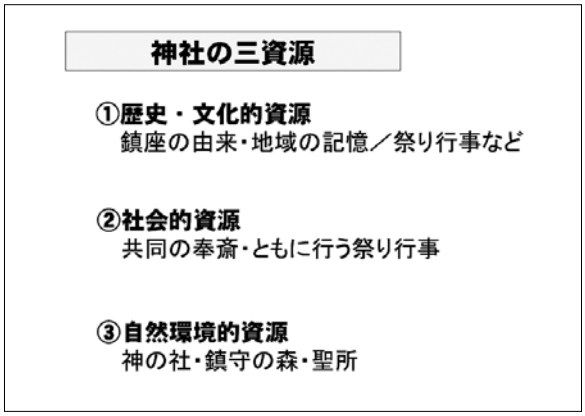


図 10

そうした中で神社ということに焦点を絞りますと、神社の持っている資源として、私はスライド（図 10）でお示しした３つを提案できるのではないかと考えます。一つは歴史的、文

図 11

図 12

化的な資源です。神社の中には新しくできる神社もあります。古くからある神社もあります。それらも含めて私は全て、この歴史性を持っており、そこに神社が祀られるという意味、あるいは祀ろうとする人々の考え方も含めて歴史を持っています。そして、神社があることによって芸能とか、あるいはいろいろな生活上の工夫とか、そういうものが生み出されます。もちろんものの考え方も生み出されてまいりますので、歴史や文化的資源というふうに考え、一つの資源として捉えることができるだろうと思います。

ここでお示ししているのは、伊勢の神宮の祭儀の様子の一端です（図 11）。右側の写真は毎日朝夕、神々に食事を差し上げる施設で、御饌殿（みけでん）と言います。神職さんが神様の食事を調理し、差し上げられるのです。こうした行為の中には、一つの伝統のあり方というものを示しているところがございます。左の写真が、調理をするために、毎朝火を起し、その火を以って、お台所に相当する忌火屋殿（いみびやでん）で使われるというわけです。火を燧（き）るという行為を考えてみますと、今の私たちの非常に便利な生活に対して、非効率で不自由な姿を示しているかもしれませんが、こうしたことで神様の祭りが成り立つという余裕を神社が示している。文化の一つのあり方だと捉えうるかと思います。

それから 2 番目は、社会的な資源です。この社会的な資源という場合にはいろいろな状況がありましょうが、私はこの一つの中に、人々がつながりを生むという機会としての神社の役割があろうかと思います。スライド（図 12）に示しましたのは、本当に田舎のお祭りです。多分こういう場面というのは、今日ではあまりないかもしれません。しかしこれを見ていただきますと、村の人たちがゴザを敷いていて社殿の前で座っているのです。これが当たり前なのです。全員が正装して椅子に腰掛けるとかそういうのではないのです。しかしながら、村の子供がこの祭りで舞を奉納しているのを、年配の人たちみんなが見に来るのです。「村の孫」なのです。そういう意味で地域のつながりというものが、自然なかたちでよく出ている光景だと思います。こうした点で、神社で行われる祭りも改めて注意したいところです。

次は、後ほど黒﨑先生からもお話いただけるだろうと思いますが、震災に遭われた地域の状況です。お示しする事例は、失われた獅子舞の道具を新しくされ、子どもさんとともに伊勢の神宮で奉納するということが実現した時の一

図 13

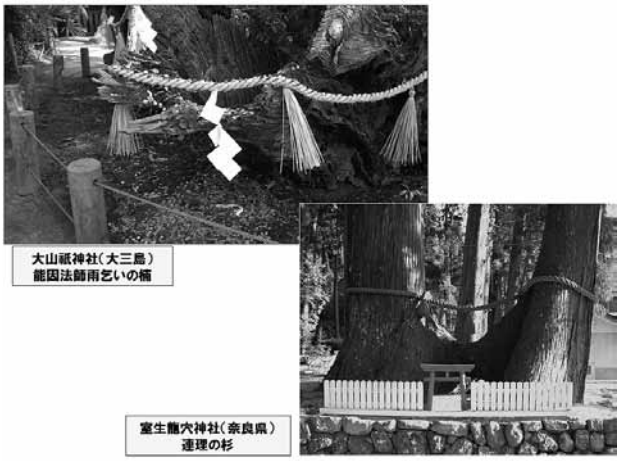
図 14

こまです（図 13）。岩手県の山田町と、伊勢市の方々とが神宮という点で結びあったのですね。神宮の外宮が鎮座する地は、山田と称しますので、「山田つながり」ということのようです。地域の方々がこうした行動をとられたことも、やはり獅子舞という伝統的な行事、そしてそれが神社と深く結びついたところのものが、人々のつながりを保つ、大きな要素となっていることが分かろうかと思います。

３つ目が自然環境的な資源のことでございます。すでにこうした問題がこれまでにもよく指摘されておりますので、私から申し上げるところは少ないかもしれませんが、改めてスライド（図 14）のような記事を掲げさせていただきました。「神道」という用語自体は、古代文献に沢山登場するわけではございません。『日本書紀』に３例程出てくるのですが、その中でもここで用いられた神道の語が、今日言われるような神道と同じなのか、それともこれは道教そのものを言うのだというような議論もございます。特に 36 代の孝徳天皇即位前紀の記事内容を見ますと、孝徳天皇は「仏法を尊び、神道を軽（あなず）りたまう」と出てきます。「軽る」とは具体的にどういうことかといいますと、「生（いく）國魂社（くにたましや）の樹を斬りたまふ類也」と記事に出てまいります。スライド（図 14）の左の写真は、この日本書紀の当時の場所かどうか分かりませんが、現在の大阪の生國魂神社です。ここは戦災に遭われましたので、社殿が木造ではなくてコンクリートで再建されましたが、森が少しずつ広がり、大きくなっていく状況のお社です。

大山祇神社（愛媛県今治市大三島）
御神木「平知（千）命お手植え楠」

図 15



大山祇神社（大三島）
能因法師雨乞いの桶

室生龍穴神社（奈良県）
連理の杉

図 16

伐ってはならない木として「神木」と呼ばれるものがあります。各地のお社で見出すことができますし、特に大きな神木ですと（図 15、16）、そこに何らかの伝承や物語というのが付け加わって、当該社会の中で記憶されていくという、そういう点がございます。

神仏関係という観点で、『今昔物語』を見ておりましたら、推古天皇の御代のこととして、お寺を建てるにあたり、予定地に大木があって、これを伐採する話が出てまいります（図 17、18）。この記事は、専門的な研究の方からは、いろいろと議論があろうかと思いますが。その内容を捉えてみますと、お寺のお堂を建てるのですが、あまりにも大きな木があったので伐ろうとしたのです。ところがいざ伐ろうとしたところ、作業に当たる人が亡くなってしまったのです。再三そうしたことが起こるので、これは良くないことだと思って、僧侶の方が夕暮れ、人目につかないようにして木の根元で様子を窺っていると、木の上の方で何か話し声が聞こえるのです。その内容は、祓いの儀式が行わ

今昔物語（巻11・22話）

推古天皇、本の元興寺を造れる話

推古天皇と申す女帝の御代に、此の朝に仏法盛に発て、堂塔を造つ人世に多かり。天皇も、銅を以て丈六の釈迦の像を・・鋳さしめて、飛鳥の郷に堂を起て・・安置せしめ給はんとして・・堂ヲ起つべき所に、当に生け む世にも知らず古き大なる槻有り。・・疾く切り去けて堂の壇を築くべし」と宣旨ありて・・始も斧・鑿を二三度許り打立る程に死にかば、・・・慥々寄りて伐る程に、亦、前の如く俄に死ぬ。・・・「何なる勘当有りと云とも、今は更に木の辺に寄るべきに非ず。斛の有らばこそ公に仕らめ」と云て、慥ち迷ふ事限り無し。

其時に、或る僧の思はく、「何なれば、此の木を伐には人は死る」と「構て此事知らばや」と思て、雨の隙なく降る夜、僧自ら蓑笠を着て・・木の本に窃に居ぬ。夜半に成る程に、木の空の上の方に多の人の音聞ゆ。聞けば、云なる様「カクテ度々伐りに寄来る者を伐らしめずして、皆蹴殺しつ。さりとて、遂にきらぬやう有らじ」と云へば、亦、異音して、「さりとも、毎度にこそ蹴殺さめ。・・」、異音して、「若麻苧の注連を引廻らして、中臣祭を読て、柚立の人を以て縄墨を懸て伐らむ時ぞ、我等術つくべき」ト云ふ。・・異音共、嘆たる言共にて云合る程に、鳥なきぬれば音もせず。僧、「賢き事を聞ぞ」と思て、抜足に出ぬ。

図 17

今昔物語（承前）

其後、此由を奏すれば、公感じ喜給て、其僧の申す如くに、麻苧の注連を木の本に引き廻て、木の本に米散し幣帛奉て、中臣祓を誦ましめて、柚立の人を召て、墨縄を懸て伐らしむるに、一人も死ぬる者無し。木漸く傾く程に、山鳥の大さの程なる鳥五六許、木末より飛立て去ぬ。其後に木倒れぬ。皆伐り揮て御堂の壇を築く。其鳥共は南なる山辺に居ぬ。天皇此の由を聞給て、鳥を哀て、忽に社を造、其鳥に給ふ。今に神の社にて有り。（下略）

【結末】堂が完成し仏像を納めようとしたところ、入り口が狭く、壁を破ろうなどと相談していた。そこへ八十程の翁が登場し、仏像のおとがいを引き、たやすく堂内へ引き入れた。誰も翁のことを知る人はなかったが、人々は「化人」（仏菩薩の化身）であることを悟った。

図 18

図 19

れれば、自分たちも打つ手がなく伐採されてしまうだろうということなのです。そこで木に注連縄を廻らせ、幣帛を供え、散米して中臣祓（なかとみばらい）を読み儀式を行って伐採したところ事なきを得たというものです。中臣祓とは先に紹介した大祓詞が後世そのようにも称されたものです。中臣氏が朝廷の祭祀を司る一族であったことに依るわけですが、話は伐採してお堂を建てたで終わらずに、実はその木を倒すと、鳥がその上にいたのだということになりました。ではその鳥のねぐらはどうするかということで、大木を住いとしていた鳥に対して改めて社を建て奉った。現在も神の社があるという、鳥への対応の記述が出てきます。

仏教説話ですが、環境問題にもかかわるテーマですね。大木への対応問題は、決して昔のことではなく、現在でも潜在的にあるのではないでしょうか。人間が何らかの用途で樹木を用いる、あるいはどうしても伐採しなければならない場合には、木々に対しての儀礼を欠かさず行う、そういう意識や行為の意味をもう一度振り返り、その意義を問う機会を、現在は迎えているのではないでしょうか。スライド（図 19）は、遷宮の最初に行われる「山口祭」の様子です。料材をいただくにあたり、入山するのですが、その節に、山口の神へのお祭りを行うわけです。この祭りが行われないと遷宮の諸祭は始まらないというとても重要な位置づけにある祭りです。こうした点でも、森の神聖性ということを、神道が儀礼を通して実践的に示してきたのではないかと思います。

以上、3 つの話題を柱として話をさせていただいたのですが、基本的に私たちはこれまで自然に対して、恵みへの感謝ということを肯定的に受けとめてきたのですが、実はその恵みの中には、非常に自然の持っている恐ろしさ、あるいは先ほどの祝詞の言葉で言えば、「荒き水」の世界、こういうものも感じておく必要があるのではないかということです。恵みの両面性、恩恵という面と、畏怖を忘れるなという自然からの教えへの恵みです。

ただ、今ここで申し上げた両面性という問題は、例えば災害に対して、天罰だという理解やそれで事を収めるということではありません。むしろ、常に私たちの身近な場面で、両面性を持つ「恵み」に気づいて来なかったという反省です。そうした点を、神道が、大きな声ではないのですが、それぞれに発信してきたといえないでしょうか。こうした認識が今後も広くつながっていくことによって、また新たな対話と、そして環境に対しての、ともに解決を目指していく方途があるのではないかということをお話して、私の講演とさせていただきたいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。

＊図 1 、11、19 の写真は神宮司庁のご許可を得て掲載しました。御礼申し上げます。

鎮守の森の防災拠点としての見直しと再生可能エネルギー導入

國學院大學 神道文化学部教授　黒﨑浩行

お手元に配られています予稿集の 10 ページ、11 ページに今日お話する内容の概略を書いてありますが、若干スクリーンの方でも写真等をお見せしながらお話を進めていきたいと思います。今回パネル発表のお話をいただきまして、何か話題提供といいますか、問題提起できるとしたら、東日本大震災における宗教者の取り組みというところに、私も若干関わらせていただいておりますので、その中での経験から神社神道とこの震災との向き合い方から、環境倫理の構築というところに何か結びつくところがあればということで話題提供させていただきたいと思います。

約 4 年 8 ヶ月前、平成 23（2011）年 3 月 11 日に東日本大震災が発生しました。2 万人に及ぶ死者、行方不明者を出しました。また、合わせて起こった東京電力福島第一原子力発電所の事故によって、現在でも福島県内外に 12 万人の避難されている方がいらっしゃるという状況です。その影響が現在でも続いている、震災は終わっていないということです。私は「宗教と社会貢献」というテーマの共同研究に震災以前から関わっていまして、その研究の仲間たちなどからお声掛けをいただいて、この震災における宗教者のさまざまな支援活動についての、情報提供、情報共有をしていこうという取り組みに参加させていただきました。

図１

私が主に関わってきましたのは二つありまして、一つは宗教者災害救援ネットワークです。これは Facebook のページがあるのですが、宗教者のさまざまな活動を、逐一リンクを張るというかたちで紹介していくというものです。これは大阪大学の稲場圭信さんという宗教社会学者の方が呼びかけをして、私もそれに賛同して参加しているというものです。

図２

もう一つが、宗教者災害支援連絡会というものです。こちらは平成 23 年 4 月に発足しました。宗教者の災害支援の活動について、お互いに顔の見える環境の中で情報交換をして、より良い支援について話し合うというものです。

こちら（図 1）が宗教者災害救援ネットワークの Facebook のページです。現在も更新を続けています。直近のところでは今年の 9 月に茨城県、栃木県、あるいは宮城県で起こった豪雨災害です。こちらでもさまざまな支援活動についてもフォローしております。また、ネパールでの地震における宗教者の活動についてもフォローしています。これが最初にこのページが立ち上がったときの稲場さんの書き込みですが、宗教者・学識者・市民の皆様ということで呼びかけをさせていただきました。宗教・人種・国境を越えてメッセージ、祈りが届けられたと。それを共有していこうということで始まったものです。

図３

宗教者災害支援連絡会(図 2)ですが、今は少しペースを落として、2 ヶ月か 3 ヶ月に一回ぐらい情報交換会というのを東京で開いています。これ（図 3）は第 1 回の様子ですが、当初は 70 人近い方々が、月一回開かれていた情報交換会に集まって、熱心に活動内容を

図４

図５

お互いに交換するということをしてきました。現在は少し参加人数が減っていますが、また来年も続けていく予定になっています。

また、本学でも國學院大學のさまざまな震災に関係する支援活動や、関連する研究教育事業というものを行っています。細かくはここでは申し上げませんが、今回のシンポジウムを共催しています、共存学プロジェクトもそういった震災の被災地における、さまざまな取り組みについての情報収集、またこの会場でのシンポジウム、フォーラムの開催なども行っています。また、さまざまな研究事業、これも特に震災からの地域コミュニティの復興ということに関する研究事業というものがスタートしていまして、それにも参画をしています。

そういった中でいくつか気付かされる点というものがありました。これを少しずつ紹介させていただきたいと思います。まず一つ目が避難場所、避難所となった神社ということです。今回、三陸沿岸に大きな津波、高いところでは 40 メートルを超える津波が襲いました。その津波から逃れるために高台に避難した人たち。そこで行き着いたところに神社があった、あるいは神社を目指して避難したという人が大勢いらっしゃいました。

いくつか紹介させていただきたいと思いますが、こちら（図 4）は南三陸町の戸倉という地区にあります、五十鈴神社という神社です。少し小さいですが鳥居が見えると思います。この撮影位置よりも手前のところに戸倉小学校という小学校がありました。沿岸からそんなに離れていない場所だったのですが、震災の 2 日前に実は宮城県で大きな地震がありまして、そのときに避難計画を見直すということがありました。教員たちで話し合って、実は体育館の屋上に避難するという予定だったのですが、それではやはり危ないのではないかということで、この神社が鎮座している高台の方に避難しようという意見がありました。実際に 3 月 11 日のときには、みんなでそこを目指して避難しました。それで一命を取り留めたということがありました。これは校長先生の、このときの記録が宮城県教育委員会のホームページに載っています。現在はこういうかたちで石碑が建てられています。東日本大震災の避難の記録というものをしっかり後世に残していこうということで、こういう記念碑も建てられています（図 5）。

また、こちら（図 6）は岩手県の陸前高田市にある月山神社です。これは社務所兼参集殿なのですが、こちらにもこの神社が鎮座している地区の隣の今泉地区というところから沢山の方が避難して来られました。この神社が鎮座している長部地区というのは、高台にあって多くの住民の方は無事だったのですが、隣の今泉地区は大変な津波被害に遭いました。そこから逃れた人たちがここにたどり着いて、5 月の頭ぐらいまで避難をしたということでした。

またこちら（図 7）は宮城県気仙沼市の紫神社です。ここも高台にあって、多くの方が避難しました。また、そのふもとの商店街の方たち、南町の自治会の方たちが、この神社に避難したということで、それから先の復興街づくりについてもこの神社の境内で話し合いが持たれるようになってきたということです。現在は継続して、ここの紫会館という神社に併設している会館で、さまざまな話し合いや

図６

図７

ワークショップが開かれているということだそうです。

こういったさまざまな地域で、避難所または避難場所として神社が機能したということがありました。同時に震災からの復興、回復ということに関しても、神社というものが、あるいはその神社で行われるお祭りというものが大きな力を持っているということが指摘されてきました。

こちら（図 8）は岩手県の大槌町の大槌稲荷神社です。大槌町は人口の約 1 割の方が被災して亡くなってしまうという、大きな被害を受けたところなのですが、この神社はそこの高台にあって、沢山の避難者の方を受け入れた神社です。震災の翌年にお祭りが復活しました。こういう大きな神輿を皆さんで担いで、町内をめぐるということが行われました。また、大槌町は大変郷土芸能が盛んな地域で、この祭りに合わせて、この写真（図 9）に写っています、虎舞や太神楽、それから鹿踊、また七福神舞などが奉納されました。これもやはり多くの住民の方たちが、そういった郷土芸能団体というものを組織していまして、その人たちがなんとかこの郷土芸能を復活すると言って、立ち上がろうということで行っているものです。

図8

図9

またこちら（図 10）は、宮城県の女川町の熊野神社のお祭りの様子です。こちらは震災の翌年にお神輿が復活しました。ただここは、ボランティアの方たちが非常に沢山この神輿渡御（とぎょ）に参加をして、それで復活したというものです。多くの住民の方が亡くなってしまったり、あるいは若い人たちが内陸の方に移ってしまったりという中で、この地を訪れていたボランティアの方たちに、なんとかお神輿を復活させる手伝いをしてもらいたいという呼びかけが、この氏子総代の方からなされまして、そして復活したというものでした。

図 10

またこちら（図 11）は、唐桑半島の根っこの方にあります、早馬神社のお祭りです。こちらの神輿渡御も復活しました。ここで特徴的だなと思ったのが、こういった神輿渡御などのお祭りというのが、やはり人口減少によって震災前から厳しい状況になったということがありました。この神輿渡御に関しても実は震災前に、神輿担ぎの団体というのがもっと広い範囲の方々を集めて行うように再編成されていて、今回の震災の後もそういったかたちで維持がされたということでした。またこちら（図 12）は船渡御と言って、船に神輿を乗せて、唐桑半島の先の方をグルグル回るということをされました。

図 11

あとこちら（図 13）は小泉八幡神社という、本吉町の小泉地区の神社のお祭りです。現在ここは集団移転が進んでいまして、元の住宅地はこのように更地になっています。しかし、その更地になった後の住宅地で神輿渡御を起こしているということで、これも毎年継続し行われているものです。また、子供たちも自分たちのお神輿を作って、仮設住宅などをめぐるということをしていたりします。

こういったお祭りなどを支援しようという動きもあります。これ（図 14）は東京の下谷神社の阿部明徳宮司さんが呼びかけて行った縁日で、いわき市の久之浜、それから名取市の閖上などで行われました。また、被災した神社の境内や、社殿、鎮守の森などを再生する、そういった取り組みを外部の支援を得て行うということが行われてきました。

図 12

図 13

植田今日子先生という方が指摘しているのですが、時間の流れというのはずっと直線的なものであるのに対して、お祭りというのは毎年繰り返されているという、回帰的な時間というものを表しているのです。それが震災前の日常を人々に思い起こさせる、そういった要素になっているのではないのかと、そういった指摘をされている方がいらっしゃいます。またこういった祭りなどを通じて、亡くなった方、あるいは被災した方の小さな声を聞くということにもつながっているのではないかという指摘が、精神科医の宮地尚子先生という方からなされています。

図 14

そして慰霊鎮魂ということで、これもやはり神社などを通じて行われているものです。千度大祓（図 15）という、こちらは本学の学生も参加しているものですが、いわき市の方で毎年行われています。それからこちら（図 16）は、南三陸町の上山八幡宮というところで、震災を語り継ぐ試みとして、多くの方がこの上山八幡宮の裏山を巡って避難していったのですが、そこの避難道に椿を植えようということを、この上山八幡宮の工藤真弓禰宜さんが行っていたりもします。

また気仙沼市の古谷舘八幡神社では慰霊碑が建てられました。この神社が鎮座している地域の 154 名のお名前を刻んだ慰霊碑が建てられています。「汝がねむる　この海とともに」という言葉が刻まれています。

そして防災と宗教ということで、こういった動きからさらに展開して、今防災協定を自治体と結ぶという宗教施設がだんだん増えつつあります。これは震災の被害を受けた地域だけではなく、これから大きな地震や津波が起こりうる地域、それから特に都市部や観光地などで、帰宅困難者対策が緊急の問題として挙がっている地域などで行われている議論です。第 3 回国連防災世界会議が、今年の 3 月に仙台市で行われまして、それにあわせて行われたパブリックフォーラムのひとつとして、「防災と宗教」シンポジウムが開かれました。やはり行政との連携や、それから宗教間、あるいはさまざまな市民団体との協力関係を結んでいるということが重要だという指摘がなされました。

そして、再生可能エネルギーの導入ということに関しても、震災以降動きだしています。鎮守の森コミュニティ研究所、鎮守の森コミュニティ推進協議会という団体を、千葉大学の広井良典先生、それから宮下佳廣先生などが立ち上げています。いくつかすでに動き始めているところがありまして、埼玉県越谷市の久伊豆神社では、社務所の屋根の上に太陽光パネルを設置して、そのパネルで発電した電気によって、道場を明るく照らすことができるようにしています。この道場は普段は、剣道などで使われているのですが、子育て支援の場としても使われているということで、地域の人たちになじみのある施設を、地震が起こったときに

図 15

図 16

も活用してもらおうということで、こういったことを提案しています。

またご霊水が湧き出しているのですが、これは震災のときに止まってしまったのです。ポンプで汲み出すことをそれ以降行っていて、そのための自家発電施設を新たに設置するということをされていました。

そして、こちらは小水力発電のケースですが、埼玉県の秩父郡の皆野町というところで、先週に「秩父華厳の滝第２回ヒーリングナイト」というイベントが行われました（図 17）。これは鎮守の森コミュニティ推進協議会が協力して、日野澤大神社、そして皆野町観光協会が協力をして行ったイベントで、小水力発電の実験として華厳の滝をライトアップしました。また、数年前に復活した神楽を奉納するという行事を行なっています。こういった様子です。

図 17

少し駆け足になりますが、結びに代えてということで、最後にまとめをさせていただきます。Eco-DRR という言葉があります。私も実はこの言葉は、今年の３月に行われた国連防災世界会議のパブリックフォーラムで初めて聞いたのです。Ecosystem based Disaster Risk Reduction という言葉の略で、生態系を基盤とした防災、減災という意味です。そういった防災、減災の取り組みというのが、世界中ではさまざまな地域で取り組まれているのですが、日本ではなかなかそういう取り組みが進まないのです。三陸沿岸に 400 キロの巨大な防潮堤が建設されるというのが進んでいます。これは災害対策基本法に基づく復旧事業として行っているということで、環境アセスメントも行われずに進んでいます。住民合意も十分なされていないという指摘があります。そういった動きに対して、こういった Eco-DRR というような取り組みが必要なのではないかという提案がされているのですが、今それがなかなか進んでいないという状況です。一方では再生可能エネルギーの導入や､それから防災といったような取り組みの拠点として、鎮守の森が活用される可能性というのがあります。しかしそれはやはり、発信をしていくということ、またさまざまな機会に交流や連携をしていくということが、やはり課題となっていると思います。

また、これは恐らく後のパネルディスカッションの問題提起ということでつながってくるかと思いますが、神道的環境倫理というものをこれから構築していく、あるいはその有効性を測るという際に、やはり検証ができるかたちというものを模索していかなければならないのではないでしょうか。さまざまな神道的環境倫理というものを社会的に発信したとしても、それがはたして有効なのか、有効性が測れるかたちで進んでいくのかというところは、なかなか難しいと思います。

賀陽濟先生という、一昨年亡くなられた精神科医で宮司さんもされていた方がいらっしゃるのですが、その方はこういった日本ならではの生命観、自然観というものが、なかなか社会において有効性を持たないということに関して、一方に日本文化の中にある甘えの病理という､これは土居健郎さんという精神科医の方が提示した日本文化論ですが、そういったものがあるのではないかと指摘しています。また、「環境としての母」というふうに書いていますが、そういった環境を育てている地域社会が弱体化しているという問題が指摘できると。

もう一方には、命の大切さというものを、日本人は大事にしているというふうに言われますが、同時に人の一生というのは有限であるとか、あるいは相互に依存しているということが、小さな命というものを大きな命によって犠牲にしていくということを、容認するというふうにつながってしまいかねないのです。また、そういう論理を働かせながら、さまざまな生命技術などを導入している医療者の方がいると。そういった問題提起を、これは宗教哲学者で生命倫理を主に研究されている安藤泰至先生という方が問題提起されています。

こういった中で、鎮守の森がもし神道的環境倫理の構築、あるいは有効性を測る拠点として成り立つためには、やはり命の実感であるとか、共感といったものを実践的に取り組んでいく、そういう拠点でなければならないだろうと。そしてその最後に、地域における合意形成がそこでなされるということが、恐らく重要なのではないかと思います。また同時に、生態系保全のためのさまざまな努力をされている科学者の方々、その科学者の責任ということと神道的生命倫理ということが結ばれていく､連携していく必要性というのがやはりあるのではないかというふうに思います。駆け足になりましたが、以上で終わります。

自然に善悪はない――修験道の立場から

金峯山修験本宗 総本山金峯山寺長臈　田中 利典

ご紹介いただきました田中でございます。エコイニシアティブ学会のシンポジウムという大変アカデミックな会に、私のような者がやってまいりまして、いささか浮いている感じもいたします。そんな中で「神道的環境倫理の有効性」というようなお話がどこまでできるのか、あまり自信がありませんが、表題にありますように「自然に善悪はない～修験道の立場から」ということで、自然環境の問題について少しお話をさせていただこうと思います。

まず、修験道というものがほとんど分からなくなってしまった……実は、明治までは修験者というのはもうそこら中にいたわけでありますが、明治に神仏分離――神様と仏様を分ける時代になって、これは後で申し上げますが、神様と仏様を分けることで修験道は解体をされるという事態に陥りました。それ以降わずか 140 年ぐらいの間に、山伏たち――修験道の行者のことを山伏というのですが、これが絶滅危惧種になりましてですね（笑い）。いわばオオサンショウウオ状態で、天然記念物化しているわけであります。

そこで、まず誰も知らなくなった修験道とは何ぞや！というお話をしなければいけないわけでありますが、何せ頂いた時間が 18 分しかありませんから慌ててやります。

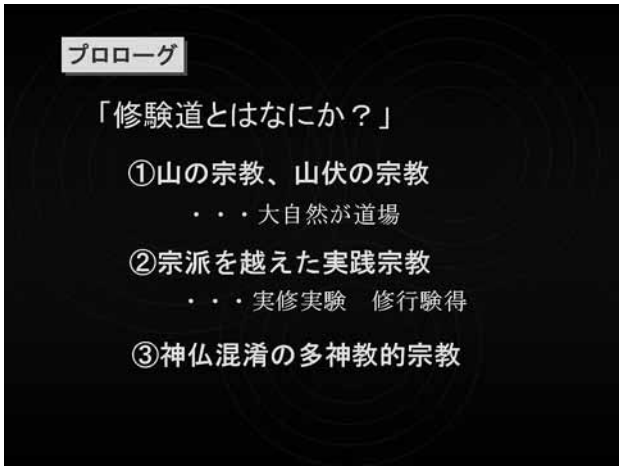


図１

私は修験道を三つの項目を分けて紹介しております。まず、修験道とは「①山の宗教、山伏の宗教」である、ということ。山に伏して修行する、大自然を道場に修行をする、そういう宗教である。山に入り、「懺悔懺悔六根清浄」と唱えながら、１日、２日、３日と山の中をひたすら歩くことにより、自分の心と体を鍛え、山の神仏（かみほとけ）に自らの心と体を同化させ、自らを高めていく――そういう宗教である。

②は「宗派を超えた実践宗教」ということ。修験道というのは「実修実験」、あるいは「修行験得」――自ら修して、自ら験（しるし）――験力（げんりき）というのですが、お山の中で大きな力を培う。験を得る。そういう実践の宗教が修験道である。大峯山山上ヶ岳の有名な西の覗きという行場では、ロープ一本に身を吊るされて懺悔をする。あるいは滝に打たれたり、座禅をするという、実践を中心として行じる宗教、これが修験道です。

それから「③神仏混淆の多神教的宗教」である。ご存じのように、６世紀の半ばに仏教が正式に日本に伝わってまいりました。それ以前に、日本人は神信仰を持っておりました。教科書で習うとおり、仏教伝来当初、崇仏派の蘇我氏と、廃仏派の物部氏の争いがありましたけれども、その後、約 1200 年間、神様と仏様は仲良くやってまいりました。ご存知のように、神仏習合とか、神仏混淆とかいいまして、日本人にとっては神様と仏様は同じように親しいものであるとしてきた。家に仏壇があって、神棚があって何も違和感がない、と。この神様と仏様が仲良くなり、いわば仏教を父、神道を母に、――皆様方のご夫婦のような仲の良い夫婦の間にできた子供のような存在が、実は修験道という信仰であります。神仏混淆の、仏教も、神道も、あるいは外来の道教も全部受け入れてできあがってきた山の宗教が修験道です。ですから、修験道というのは八百万の神様も、八万四千の法門から生ずる仏様も分け隔てなく尊び……いや、この神様と仏様をついには融合させてしまいました。

私どものご本尊は金剛蔵王権現（ごんげん）様というのですが、神と仏が同体となった権現信仰をも生み出した。吉野には蔵王権現、熊野には熊野三所権現、英彦山（ひこさん）には英彦山権現、石槌山には石槌山権現、羽黒山には羽黒権現、白山には白山権現……。日本中の霊山に、修験は神様と仏様を融合させた権現をお祀りしてきた。ですから、神も仏もその融合体である権現も祀ってきた、祈ってきた――そういう、いわばたくさんの神様がいる宗教、これが修験道であります。

すでに 5 分が過ぎました。あと 13 分で全部喋らないといけません。私は修験道の立場から今日のテーマである環境問題をお話するのですが、この問題に私が関わる大きなきっかけになったのは、先ほどご紹介がありましたけれども、吉野大峯を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」が、ユネスコの世界文化遺産に登録をされたこと……、いや、その登録を進める活動の中で生まれてきたことでございました。

図２

「紀伊山地の霊場と参詣道」は、三つの霊場と三つの参詣道からできております。霊場は吉野大峯、熊野三山、高野山。これは修験道の霊場、神道の霊場、真言密教の霊場という、それぞれ異なる霊場が紀伊半島の中に存在して、それが三つの参詣道でつないでいた。吉野大峯は大峯奥駈道、熊野三山は熊野古道、そして高野山は高野の町石道。これら三つの霊場と三つの参詣道からなる世界遺産でありますが、これをつないできたのは、実は修験信仰が中心であったわけであります。

紀伊半島全体に霊場が広がる中、1000 年以上に渡って日本人は、神も仏も分け隔てなく尊んできた。神仏習合は明治期に（神仏判然令などにより）一時､解体をされますが、それまで続けてきた日本人の信仰心、精神文化のあり方が、この紀伊半島全体に広がり伝承されてきたということが肝心で、これは何も単に高野が素晴らしいから、熊野が素晴らしいから、というだけの世界遺産ではなくて、異なる霊場が紀伊半島の大自然の中で 1000 年以上に渡って育まれてきたこと――そこに日本人の信仰、自然観、世界観が象徴されている。いわば紀伊山地の霊場というのは、日本人の信仰の原型であり、日本人が持ち得た多様な精神文化の代表である。そういうところがこの世界遺産登録の意義をなすということでございました。

一般の人は熊野古道のことしかあまり思われないようなのですけれども、これは決して熊野古道が中心ではないのです。熊野古道単体では文化庁は世界遺産登録は出来ないと判断していたと聞いています。実は、田中利典が手を挙げて……私が手を挙げることによって、吉野と熊野がつながったのです。そこに高野もつながって、つながったからいち早く実現したのですが、もし私が手を挙げなければ未だに実現していなかったかもしれない、とさえ言われている世界遺産であります。

では、私がこの世界遺産に手を挙げた理由は何だったのかといいますと、一つは先ほど申し上げました。明治に神仏分離によって修験道は解体をされ、以降、天然記念物化する中で細々と続けられてはまいりましたが、何とかこの修験道という信仰を再認識してもらいたい、明治の神仏分離の災いをここで取り戻したいという、そういう思いが一つございました。

もう一つは、吉野大峯の――我々は山で修行しますが――その修行の道場であるべき吉野大峯の自然が、ここ 20 年くらいの間に急速に環境破壊を進めました。私が奥駈に初めて参加したのは 35 年前ですけれども、それから 15 年くらいはそれほど変わらなかったのですが、ここ 20 年くらいは行くたびに破壊が進み、去年まで立っていた木が今年は枯れている、風倒木の塊のような山になったところがたくさん出てまいりました。

環境問題は、昔のように人間が入山して手を入れなければ守られる、という段階ではなくて、もう人間が手を出さないと守れないところまで破壊が進みつつある。ところが､この我々の大峯の道は､明治までは「靡八丁（なびきはっちょう）修験のもの」と申して、両側 400 メートルは我々の道場占有だったのですが、明治に修験道が解体されたことによって全部が公共用地や民有地に変わってしまいました。ですから守ろうと思っても自分たちの手で守ることができないことになっているわけであります。

「世界遺産条約」というのは地域開発とか観光振興をするためにできたものではなくて、ユネスコがその国々の固有の文化と自然を二つながら守っていこう、保護・保全していこうという条約であります。この世界遺産の趣旨と、大峯の奥駈を守ろうという趣旨が合致しているので、私は世界遺産登録を通じてこの環境破壊が進む大峯を守っていけないかという思いを持ち、手を挙げることとなったわけであります。

ところで手を挙げて、なんとたった 4 年で世界遺産登録が実現出来ました。そしてその後、私は「世界遺産吉野大峯奥駈道保全連絡協議会」という協議会を、奈良県と奥駈道の通っている当該の市町村、及び修験道の各派寺院に

声がけして立ち上げました。あるいは、この「紀伊山地の霊場と参詣道」という世界遺産に登録を受けた 15 の寺社――熊野三山、高野山、金峯山寺を含む吉野大峯の各社寺による連絡協議会――「紀伊山地三霊場会議」を立ち上げました。そういう保全に向けての活動も推進してきたのですが、登録されてみると、行政主催の世界遺産関連の事業やイベントに私は呼ばれることがあまりないことになります。

イコモスの先生方や地域振興の観光関連業者などの人たちは呼ばれるのですが、一番保全に関わってきた、あるいはそこを聖地として歩いている我々自体が呼ばれることがない。世界遺産登録をされたときに、「カストーデアン」という言葉に出会いました。これは、その遺産を守っていく第一の門番という、国際文化観光憲章に謳われる言葉であります。本当は第一の門番はお寺であり、神社であるはずなのですが、行政からは呼ばれることがなかったわけであります。

あと 5 分で話を終わらなければいけないのですが、今日ここで私が言いたいことは二つであります。一つは今申し上げました。環境問題を考えるときに、日本で問題になることが一つあります。政教分離の問題であります。行政が、環境省も含めて、環境問題に手を出すときに、なかなかお寺や神社と一緒にやることが難しい。最近この学会も含めてですが、環境問題と宗教を考えるという試みが、ある種の同時性を持って行われているように感じますが、現実にはというと、その活動を行政と一緒にやっていこうというのは、今申し上げた世界遺産登録の前後の問題を含めてもなかなか難しい。政教分離の問題が大きく立ちはだかっている。

二つ目は、環境問題自体の問題であります。先ほど来、東日本大震災についての発言がありましたが、本当はあの大震災で日本人はもう一回目覚めないといけないことがあったはずです。震災当時は「大変なことになった」という思いがあったのですが、今はだんだんと無かったことにしようみたいな空気になっています。当時、ほとんどのテレビがこの震災関連の報道を終日をやっておりましたが、テレビ画面に出て福島原発事故やいろいろな問題について語るときに、何度も何度も、枝野官房長官は「想定外のことが起きた」ということを繰り返し言っておりました。私はあれに大変違和感を覚えました。想定外というのは結局、自然災害や津波や地震を、ある意味想定しているわけであります。

図３

自然というのは、実は想定の範囲を超えたものが本質である。その中、日本人は自然とどう生きるか。どう向き合うか。――自然には恩恵もあります。脅威もあります。しかし、そこに善悪はないわけであります。自然はおのずからあるもの、である。そしてそこに日本人は神を見、仏を見、自然の中で生かされながら生きてきた。そういう価値観がどうやら、いわゆる修験道が廃絶の憂き目に会うあの明治以降、近代化によって捨て去られてきたのではないか。その近代化の象徴が、私は、一つは原発事故だと思っています。

よく共生ということを言いますが、実は共生は共死を伴う。日本人は自然の中で生かされながら生きてきた。そして、自然と共に死んできた。自然が脅威となったときには、たくさんの命、たくさんの生活が奪われることを繰り返し、繰り返ししながら、私たちはその自然と共に生きてきつづけてきた。そこに神社が生まれ、神が祀られてきた。そういう自然との関係性を、どうも明治以降、私達は忘れてきたのではないか。

近代をもたらしたのは一神教の価値観が根底にあるといいます。ところが、どうも一神教の価値観、自然観はもうもたないところに来ていて、日本人が自然の中に神を見、仏を見出してきた価値観、自然観――そちらの方がこれからは大事なのではないか。明治に修験道は廃絶しましたから、逆にその修験道が持ってきたものこそ、近代以前の価値観を思い出させる大きな力になるのではないかということを、私は思っております。

今まで世界中の経済の考え方は、近代資本主義が根底でした。近代における資本という考え方は、人的資本、社会資本、金融資本、物的資本、この四つの項目で経済興隆の資本を考えてきましたが、近年ではそれに加えて自然資本ということを考えるようになって来たそうです。これはいろいろな方が仰っているようで、とりわけスタンフォード大学の今井賢一先生なんかが仰っていることによると、経済資本というものが年間に作りだす経済効果は 11 兆ドル。

これに対して、自然資本が作りだす経済価値は 18 兆ドル。実は自然が生みだすもののほうが遥かに大きいわけであります。

で、何が問題かといいますと、この自然資本がどんどん毎年減って来ている。ところが先進諸国の中で、自然資本――自然の鉱物であるとか、いろいろな自然からの恩恵によって生み出される価値、これが唯一減っていないのが日本である。日本はなぜ減っていないかというと、これはどうやら草や木や動物や、そういうものと人間とを分けない思想――いわゆる神道的な、仏教的な、修験道的な、そういう思想を持っているということが実は前提となっていて、ここに環境と資本を考えるベースがあるのではないか、という提言をなされております。まさに我々は今、そういう時代に入っているのではないでしょうか。

図４

去る 11 月 22 日に京都の清水寺で第 1 回のシンポジウムを開催した「一般社団法人 自然環境文化推進機構」をこのたび新しく立ち上げました。代表理事に宗教学者山折哲雄先生をお迎えして、京都の文化人や、お寺と神社が一緒になってやっていくという法人なのですが、一方で、行政と一緒にやっていける団体にしようという――政教分離を乗り越えようという方向性を持っております。また、一神教ではもう持たなくなったのではないかという前提で、あらゆるものに神や仏を見てきた日本の宗教が培ってきた寺や神社が、直接的に環境問題に取り組んでいける――そういうかたちを提言しようという団体であります。今回は、この学会を含めて、世の中はそういう方向にまさに歩みだしつつあるということを、修験道の立場から自覚する者としてお話をさせていただきました。

ちょうど時間でございますので、これにて終わらせていただこうと思います。ご清聴ありがとうございました。

エコロジー的世界観と「人・自然・宇宙」曼荼羅――「共存・共生」の視点から人類文明を問う

國學院大學 経済学部教授　古沢広祐

転換期をむかえた現代

こんにちは。一人 20 分という短い時間で、いろいろなことをお話したいのですが、お手元に資料があります。そこに補足的な文章も中に入れておりますので、十分話しきれないものに関しては、そちらを参照いただければと思います。「エコロジー的世界観と曼荼羅」という大それたテーマを付けましたが、実は現在の私たちと世界について、人間のあり方が根本的に問われている、大きな転換期を迎えています。この転換期に関して、今日のテーマであります環境の倫理ということが、神道的世界観や自然と人間とのあり方を問い直す視点として、新たな倫理思想をどう作り出すのかということで、その点をぜひ皆さんと考えたいということが本日の会合のねらいです。その点をふまえて、あとの後半の議論の素材を多少とも提供したいと思います。

図１

図２

最初に図（１）ですが、横の線が 100 年単位の推移で人類活動の様子を立体スケールで表したものです。人口がどんどん増えて、大量のエネルギーを使い情報や交通量など、まさに急成長しています。20 世紀、今は 21 世紀ですが、この活動状況がどんどん天井を突き抜けていくのです。20 世紀に人口は約 4 倍に伸びたのです。21 世紀はどうなるかというと、この天井を 2 倍、3 倍に突き抜けていくという世界がはたして起きるのか？これが根本的な、私たち人間に問われている課題だと思います。

（図２）の上部は宇宙から地球を見た姿です。輝かしい繁栄ぶりですが、ただこの繁栄が今後ともずっと続くのか、持続可能なのかというところが大きな問題です。先ほど、人間が自然資産というか、自然の資本をどんどん食いつぶしているというお話がありましたが、これは同じような状況を示した図です。自然が与えてくれる許容量をどんどん超えているのです。

（図３）は地球の許容量（エコロジカル・フットプリント）の数を表していますが、地球は二つあっても、三つあっても、五つあっても、十個あっても足りない、つまり食いつぶしていくという、そういう時代を私たちは生きているのです。

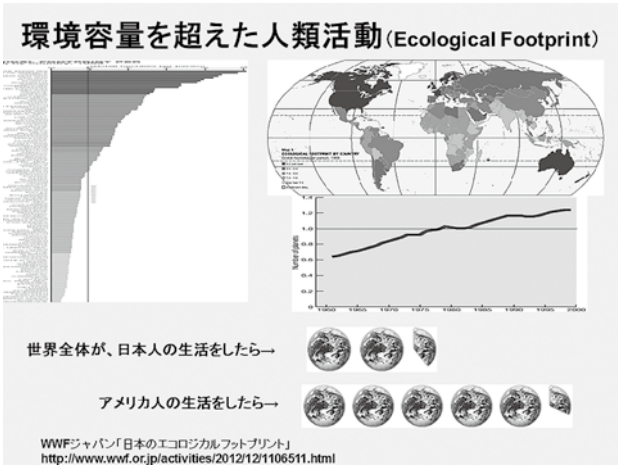


図３

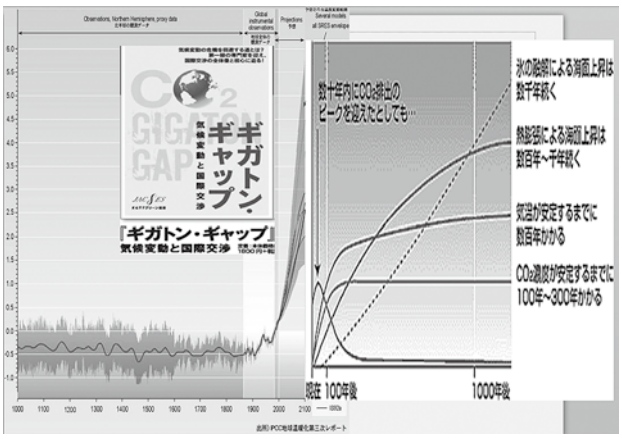


図４

特に 2015 年というのは、実は非常に大きな転換点というか、ちょうど９月の末に国連でサミット、戦後 70 周年の総会がありまして、これから先の 2030 年に向けて新しい目標、持続可能な目標というのが採択されました。また来週から、フランスのパリで、今テロで大変なのですが、国連の気候変動枠組条約会議、COP21 と言いますが、これから先の温暖化問題にどう対応するかという会が開かれます。どちらにおいても、なかなか目標や理念は語られても、現実はどうだったかというと、困難で無理な状況が実態なのです。『ギガトン・ギャップ：気候変動と国際交渉』（オルタナ発行）をなんとか間に合って出版したのですが、気候変動を抑える目標との大きなギャップを象徴してタイトルをつけました。つまりもう限界を超えているので、なんとかこれでストップしなければ、ということです（図４）。

しかしストップができない、ギャップがどんどん開いていくという時代が、今目の前に動いています。残念ながら我々は気候変動に対して、予防の段階を過ぎてしまい、それに対してどう緩和するかという状況にあります。抑制から緩和策を考える動きで動いており、自然の災害みたいにそれにどう適応しようかが重要課題になりました。昨日、閣議決定で日本も､そういう適応のための戦略を立てるということが決定されました。来週からのパリでの会合では、人類がどういうふうに、災害やこういう気候変動と、大異変に対して準備するか、適応するかということがメインの議題なのですが、それだけでは収まりません。損害や被害が生じますので、どれだけの損害が生じるのか、その損害や被害に対して誰がどれだけどういうふうに保障するのか。これが議論になろうとしています。

私たちは大きな時代の転換点に位置しています。（図４）にありますように気候の変動の今後の様子です。今起きている動きは、この 10 年、20 年の単位ではないのです。変動は徐々に進行し拡大していき、地球の大きな水のサイクルや､海流や気象､気温のサイクルで言うと､100 年単位､1000 年単位でこの変動がじわじわと広がってきます。ですから今世界で起きている気候の異変というのは、ほんの序の口の幕開けです。この幕開けがだんだんと事態として展開していく、その事態がこれから 100 年、200 年、1000 年を超えて展開していく。そういうドラマが今もう始まりかけているという、そういう時代に私たちは生きています。

人間の在り方を問う：可能性と危険性

そこで問われるのですが、私たち人間というのは一体どういう存在なのでしょうか。人間は一体どこから来て、どこに行くのでしょうか。これは宗教も含めて私たちが必ず問いかけられている本質的問題であり、人間と世界の成り立ち方への問いなのです。現実の世界というのは、今の地球環境問題の限界を超えていくということと同時に、人類のその大きな力、巨大な繁栄をもたらす力は、実は外に向けての豊かさだけではなくて、その力は我々自身をも破壊するものなのです。戦争やテロもそうですし、世界全体で、いろいろなかたちで内戦も含めて起きています。少し昔を振り返れば、戦後 70 年ということもありますが、20 世紀の時代はまさに大量殺りくの時代です。（図５）にジェノサイド（大量殺戮）とありますが、こういうことを生み出してきましたし、巨大な力を我々自身が抱え込んでいるという、こういう矛盾に満ちた存在だということです（図６）。

20 世紀から 21 世紀の課題としては、その力が我々生命そのものを操作する、遺伝子操作などの進展です。DNA をいろいろなかたちで合成して、生命自体を作りだす、設計を作りだすような段階にきました。これを合成生物学と言いますが、この研究が今進んでいます。また、気候変動に対しては、地球のシステムそのものに対して操作をする、これはジオ・エンジニアリング（地球・気候工学）と言いますが、地球の気候を工学的に操作しよう、コントロールしようという研究が行われているのです。まさに大変なことを、この 21 世紀の時代に人間は行おうとしています。

はたしてこれが、どういうことをもたらすかということが問われているのです。この課題は、後半で皆さんとぜひ議論したいと思うのですが、まず人間自身の存在を、どう捉えるか。改めて反省するといいますか、今日のお話でもありました、その環境の倫理ということで言うと、その自然の恵みの受け皿であるとともに、その力を我々が地球に対して投げ返し、ある意味では改変していくという力を持っている存在でもあります。その力自体が、実はまた我々

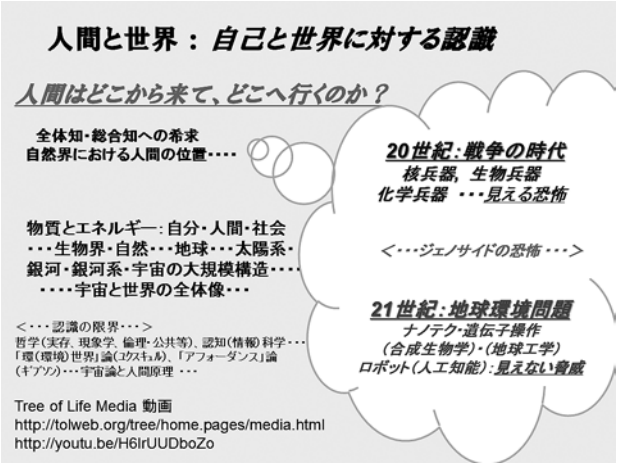


図５

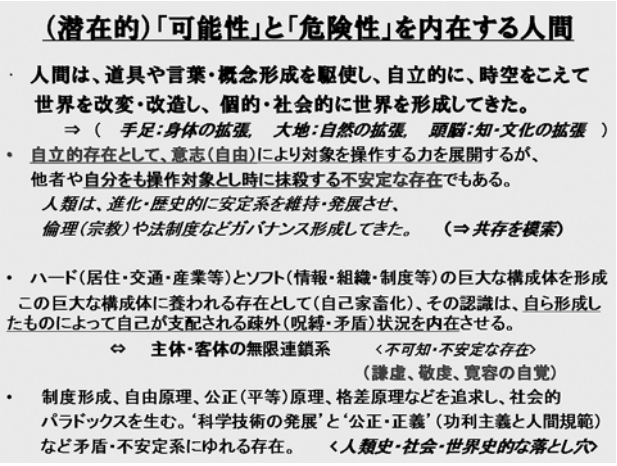


図６

自身に戻ってくるのです。このジレンマといいましょうか、矛盾の姿をどこまで深く認識するのか、これが今私たちに問われているのです。自分たち自身もそうですが、人間社会、あるいは人類社会、世界そのものに対して問いかけられている奥深い問であり、答えを見いだせるかどうかです。実際の具体的に浮上している課題は、来週からの国連会議でもそうですし、経済的摩擦や政治的問題など、いろいろなかたちで問われています。

宇宙の中で人間存在とは？

ここで、我々が認識を深め見出してきた世界について、簡単に見ていきましょう。、これは時間と空間の拡がりの中で見出してきたものですが、人間の存在がいろいろなかたちで改めて再認識され始めました。宇宙の中での人間という存在を、改めて認識する時代が始まっているのです。長い時間軸の中で、宇宙のビッグバン（始原）といわれていますけれども、世界の起源そのものに対する究極の姿を見出しつつある。まだ答えは見つかっていないのですが、物質についてもいろいろなかたちで究極の粒子を発見するとか、あるいは宇宙の果てないしは起源を明らかにするというように、私たちの認識はそこまできているのです。

これをスケール的に見ると、（図７、８）のようになります。私たちの世界はどういう世界なのでしょうか。細かくお話する時間はありませんが、想像してみてください。コスモスカレンダー（宇宙の歴史カレンダー）と言うものがありますが、1 年間の宇宙の誕生から見ますと、人類の活動というのは、わずか除夜の鐘の 11 時 59 分以降、そして秒の中で単位になっています。こうした姿を、私達はいろいろなかたちで改めて認識し始めています。最近話題になった NHK の宇宙白熱教室でも紹介されていましたが、いろいろな宇宙論、科学論の中でも言われています。

興味深いことに『淮南子（えなんじ）』という紀元前 2 世紀の中国の古典（百科事典）に初めて宇宙という言葉が出てきます。宇というのは、古今東西の歴史の時間軸です。そして宙というのは、空間の拡がり領域です。この空間と時間を人間

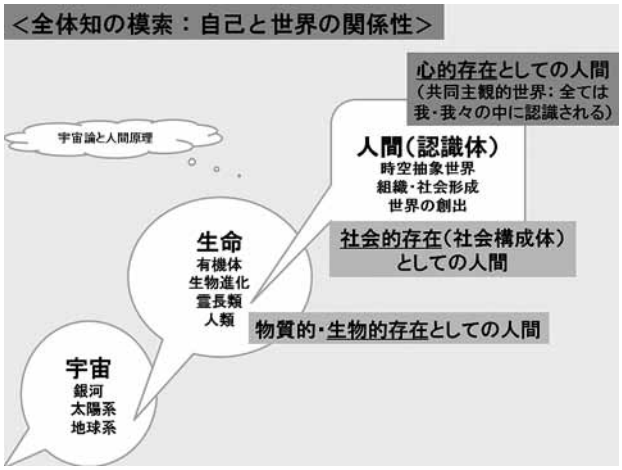


図７

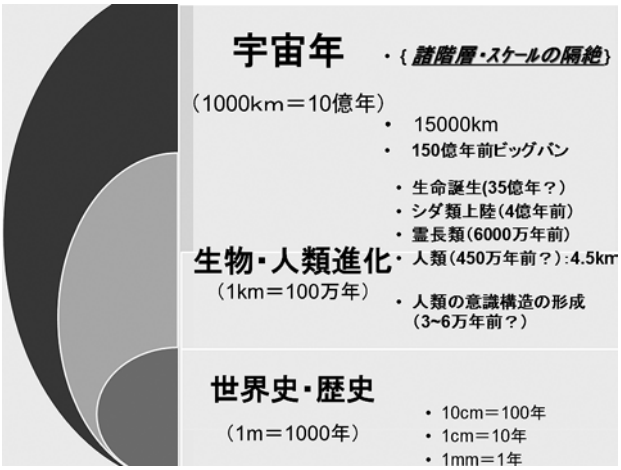


図８

がある意味では認識する、自分の中に取り込んでいく、そういう様子を表していたわけです。これは、さまざまな宗教の世界観、例えば孫悟空の世界などでも出てきますが、いろいろなかたちで世界をとらえてきたことを表し、今日につながっています。

そして、いわゆる近代の知性、科学的認識の中で改めて再認識されて、認識が深まっています。（図９）は生命の樹（Timetree of Life）です。宇宙の歴史の中に、地球上に広まっている生物たちの世界の系統樹です。これは、まさしく生命の曼荼羅（まんだら）という言葉を使わせていただきたいのですが、私たちの存在そのものはこういうかたちの図絵の中に凝縮されて現れています。これらの様子は、いつでも YouTube で見られますのでぜひご覧いただきたいと思います。

＊宇宙と物質の究極を 10 の階乗で見る動画：
https://www.youtube.com/watch?v=0fKBhvDjuy0
＊生命の樹（Tree of Life Media）動画：
http://tolweb.org/tree/home.pages/media.html

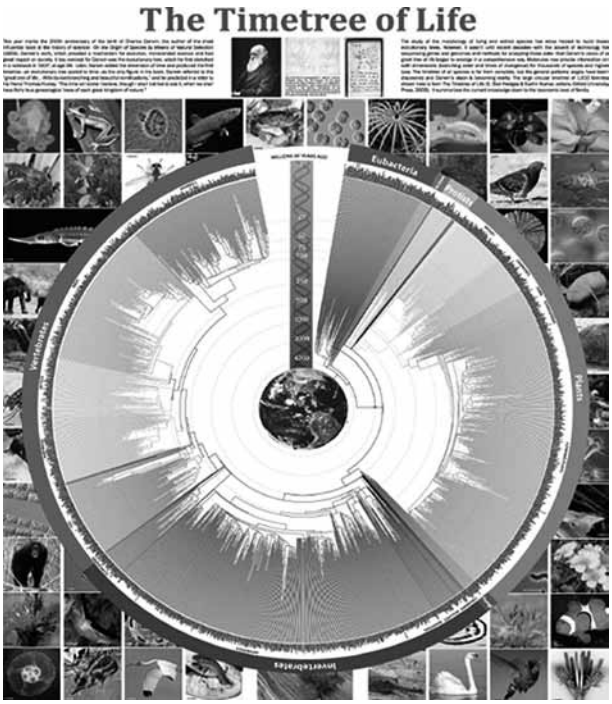


図９

このようにして私たちの存在そのもののあり方が、かつて、宗教的といいますか、古代の賢人が感性という力、あるいは山々の自然の中でつかみとった、自然と人間の認識のあり方を、改めて我々は知の世界の中で再確認し、目覚めようとしているのです。曼荼羅という象徴的な図絵、一つの姿が、今は科学の中で人類の根底的な思想として再現、再構築されてきているわけです。過去の知性と感性なりに求めてきたものが、人類の英知として改めて呼び戻されているというふうに思います。ただし、冒頭に言いましたけれども、実際にはなかなかこの我々がつかみとろうとしている認識世界は奥深く、知の世界の拡大の一方で、その知の力は自分自身の存在を実は壊していく、そういう力でもあるということです。

ただし、その認知の仕方を改めて今日は問われていまして、一種の東洋的と言うのでしょうか、そういう中での伝統的な知をもう一度呼び戻すという意味で議論されていると思います。私たち自身が実は宇宙である、宇宙の中に私たち自身を見出しているのです。つまり人間自身が、（図７）にありますように個体としての存在は宇宙、そして一つの地球ともつながっているのです。これは古くからいろいろなかたちで言われるのですが、一番最近よく言われるのは、「身土不二（しんどふじ）」です。自分の身体と大自然（土）は二つではない、一つのものという認識です。これは、最近はロハス（LOHAS: Lifestyle of Health and Sustainability）というようなかたちで、自分の健康と地球の健康はつながっているのだと、そういう生き方をしようというような動きとしても、これは西欧等で言われ始めた動きですが、そうした認識がやっと始まりました。

とは言うものの先ほどふれましたように、私たちの活動はまさにその限界を超えてどんどん拡大しています。そこで、持続可能な発展というキーワードが 92 年の地球サミットで打ち出されました。それ以前からあった言葉なのですが、国連の大きな目標として普及します。そして今年 2015 年、国連でこれから先の、2030 年へ向けての人類の新しい目標として「持続可能な開発目標」が採択されました。理念としては、非常に大きな動きになってきています。そして、国際的にも気候変動枠組条約や生物多様性条約というかたちで、人類活動をある意味では縛る枠組み、国際条約が締結されました。気候変動条約は、つまり化石燃料をどんどん使って、資源をどんどん食いつぶす行為を抑制していこうという条約です。多様性条約は、人類だけが大繁栄して、他の生物たちを絶滅させていくというような動きを抑える、もう一度多様な生命との共存を図っていこうという条約です。参加しない国もいますが、これらが国際

的な合意の中で作られたのです。

ただ、なかなか現実はそういう方向に舵取りしがたい、方向性は示されたけれども、どのように社会の仕組みの中に組み込めるかということが大きな課題として模索が続いているという状況です。

二つの未来

そして生物多様性条約の 2010 年名古屋会議（COP10）の写真と少し下にありますが、最近アメリカで解禁される改良鮭の写真です（図 10）。遺伝子組み換えして成長能力を倍にしたスーパーサーモンが解禁されることになります。日本にも早晩入ってくるかと思いますが、つまり食糧問題を解決するのに、人間は生命の遺伝子を操作して、その限界を突破していく大それた研究が進んでいます。

最後の結論になりますが、私たちは大きな転換点に今立っています。世界の将来像について、いろいろな未来シナリオが語られているものを示したのが（図 11）です。もう一度自然との調和、今日のテーマのような、倫理性を獲得しようという方向、自然の恵みと豊かさと畏れを取り戻そうという、自然を指向するベクトルに対して、いや、自然の限界を超えていこう、テクノロジーの力で、科学技術の力で困難な限界を乗り越えていこう、二方向の力がせめぎあっています。

図 10

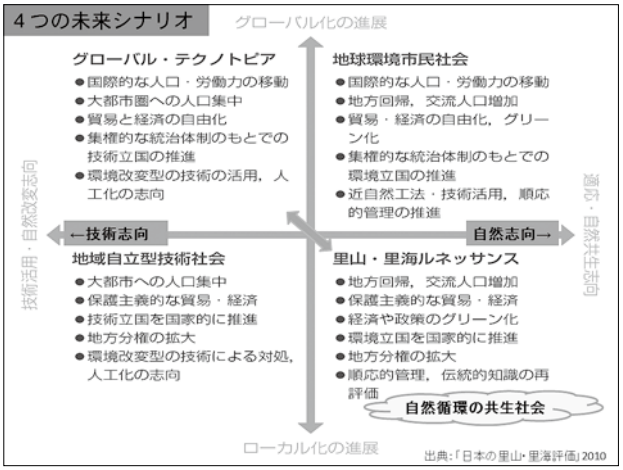


図 11

またグローバルな世界が拡大している中で、先ほど日本は持続可能な状況を維持していると言うお話もありますが、残念ながらそれは他国の資源をどんどん持ってくる、他国の食料や木材をどんどんグローバルに輸入するという力があるからこそできています。非常に皮肉な状況もあるのですが、さらなるグローバリゼーションの方向にいくのか、もう一度この里山・里海ルネッサンスというような姿に、身近な自分たちの足元にある豊かさに目覚めて、その豊かさの中に未来を作り出していこうという方向に向かうのか、これがせめぎあっているのです。どちらの方向に私たちが行くのでしょうか。今の日本はどちらに向いているのでしょうか。あるいは世界はどちらの方向に動いているのでしょうか。これを今日私たちは、こういう場の中で問われていると思います。

現在、國學院大學では将来の方向性を定めるために共存学というプロジェクトを始めています。また先ほどふれた国連の新たな世界の目標、持続可能な開発・発展へ SDGs という「Sustainable Development Goals」と言いますが、こういった目標を定めて、人類の目指すべき方向を示しています。こうした方向にどこまでいくのか、コントロールできるのかという、そこが問われていると思います。

時間がありませんので、最後に私達の世界や宇宙・生命の認識について、その一部映像シーンをご覧いただき、イメージを共有したいと思います。

改めて一度、ぜひゆっくりと見ていただくと、我々自身がどういう存在なのかということを考える力を与えられると思います。問題提起ということで、短い時間でしたが報告しました。後の議論については、よろしくお願いします。

神道的環境倫理の有効性

パネル発表者　黒﨑浩行　田中利典　古沢広祐
モデレーター　國學院大學 副学長　石井研士
助言者　皇學館大学特別教授　櫻井治男

石井　よろしくお願いします。私は見た目が、よくソフトだとか言われるのですが、実はひどい人間でして（笑い）、大分ひねくれています。こういう機会で大体司会やモデレーターと最近は言いますが、させていただくと、発題者の先生方にかなり失礼なことを申し上げることが多いのですが、そういうことを前提にしてごかんべんいただければと思います。基調講演をいただきました櫻井先生ありがとうございました。それから、それぞれ個性的で、大変意味深いパネル発表をいただきました先生方、ありがとうございました。一言だけ申し上げて、あとはひどい質問をしたいと思っています。（笑い）

櫻井先生には後ほどコメントを各先生方の発表に対して伺いたいと思います。短い時間ですので単刀直入に、私の方からまず個別にご説明をいただきたいと思うことがございます。黒﨑先生は先ほどのご発表を聞いていただきましたように、現地に足繁く通っていらして、現場を十分に承知の先生です。私みたいに数度しか行っていなくて、表面をなでたようなことしか言えないわけではなくて、良い面も悪い面もよくご存じの上で今日の発表をしていただきました。

特に今回は、鎮守の森の防災拠点の話を中心にしながら、話しをしていただきました。黒﨑先生、今回のテーマが神道的環境倫理というテーマが付いています。先生は神道文化学部の教授でいらして、もちろん神職ではないのです。私も全く神社に特別関わりのない一般の者です。ただ、神道文化学部にいらして、特に神道の環境倫理ということを念頭に置いたときに、防災拠点もそうですし、自然と現在の神道との関わりもそうですし、何か特徴的なこと、私が特徴的なことと言っているのは、実際に有用な何かといいますか、現在神道的な環境倫理が直接、もし転換点だとすれば、何か影響を具体的に及ぼす可能性があるかということをお話いただけますでしょうか。

宗教と自然、宗教と環境といったテーマを取りあげたときに、贔屓の引き倒しではありませんが、成功事例や、あるいはこういうことが望ましいという事例だけが取りあげられて、うまくいっているような印象が与えられることがあります。しかしながら現実的にはうまくいっていないということがあるのではないでしょうか。検証の必要性ということをおっしゃった点も含めて、具体的に力を持つと、どういうかたちであれば影響力を持つと思えますか。

黒﨑　ありがとうございます。実は私、石井先生が司会を務められるということで、少し予習をしてまいりました。『現代宗教 2010』という、国際宗教研究所が編集した雑誌がありまして、その中で石井先生が司会の座談会があって、かなり石井先生は辛辣な質問を発題者の方にぶつけてらっしゃって、これはかなりシビアな議論になるのではないかと予測していました。まさにその点を、今日は突かれていたかなというふうに思うのです。

今回、防災拠点としての鎮守の森の可能性ということで、実際にそういった取り組みをしている神社であるとか、

あるいは行政と連携しての活動とか、また民間の団体などと協力関係を結びながら自然エネルギーの活用に向けていっていると、そういった取り組みがあるということをお話しました。

その一方で先ほどお話をしましたように、だんだん震災の経験ということが忘れられつつあると。そして 400 キロメートルに亙るコンクリートの巨大な防潮堤が、三陸沿岸に建てられようとして、それがなかなかその方向性というのを転換するのが難しいという状況があったりします。原発の再稼働もそうです。そういったことを含めて考えると、さまざまな小さな試みというのがあるのだけれど、それはなかなか全体の大きなうねりというか、動きにつながっていかないということがあろうかと思います。

私が最後に少し付け加えさせていただいたのはまさにその点で、命の大切さや自然と共にある暮らしなど、そういったことを言葉で発信するというのは、恐らく神道ではなかなか難しいと思うのです。ですから、祭りやさまざまなイベント、行事など、あるいは実際にその地域の人たちが手を携えて、今回のような再生可能エネルギーの導入に協力していくのか、そういう活動の中に飛び込んでいくような試みというのが、広がっていく必要が恐らくあるのだろうと思います。その小さな試みというのを横につないでいって、大きなうねりにしていくということが、一つの可能性としてはあるのかなということです。

それから、もう一つ有効性ということで言うと、あるいは有効性や有用性ということで言うと、最後に古沢先生が自然科学との、あるいは生命操作など、そういった科学技術の関わり方について、そちらの方向に向かうのか、あるいは自然と共生した暮らしというのに向かうのかという、二方向のベクトルを表されましたが、その中庸的な生き方というのを、これは科学者が社会的な責任を問うということも含めながら進めていく必要性というのがあるのではないかと思います。この場には企業の CSR に取り組んでいる方もいらっしゃるというふうにお聞きしています。それから科学技術に専門的に関わっている方も恐らくいらっしゃると思います。そういったさまざまな分野の方が手を携えていくということが、恐らく重要なのではないかなというふうに思っています。とりあえずちょっとです。

石井　ありがとうございました。田中先生よろしくお願いいたします。まだ私は名刺交換もしていない状況で失礼かもしれませんが、先生のおっしゃっている、例えば環境問題を行政、理系の学者に任せず、最近文系がないがしろにされていて、少し腹の立つ思いをしていますが、先生のご発題の中で「共生は共死を伴う」とか、あるいは「自然資本の持つ重要性」というのが強調されていて、日本の持つ意味というのをもう少し世界的に発信するなり、認識することが必要だというふうに、私もその通りだと思います。

一つ気になりましたのは、先生の具体的なお話の中で、ここ 20 年ぐらい、特に環境破壊が進んでいると。先ほど控室でも少しお話を伺わせていただいて、ああ、そうなのかと思うことがございました。修験道は多神教的な世界観で、神道も仏教も含まれているということを、最初の方でもご指摘いただきましたが、この 20 年間で環境破壊が進んだと、先生が実感される、その 20 年間というのは、櫻井治男先生の基調講演で言えば、式年遷宮の翌年に、千年の森のシンポジウムが開かれての 20 年にあたるわけです。

こうした催し物が開かれて、神の森の畏敬感を、非合理的なものと退けてきたことへの批判が述べられていて、森の考え方が少しずつ変わったのではないかと指摘される一方で、環境破壊が進んでいると。神道も仏教も全て包み込むような修験道の立場から見て、神道的な環境倫理観というのは、今後何か大きな提言を果たし得るものと考えてよろしいでしょうか。

田中　聞いた話なのですが、イスラム教の宗教指導者を伊勢神宮にご案内されたときに、イスラム教徒の皆様が、「神様は不公平だ」、「我々には砂漠しか与えてこなかったのに、日本にはすでに天国を与えられている」と、いう感想を述べられたそうです。神道の持っている倫理観や価値観というのは、神職の人ってそんなに喋ったりしませんし、アジテーションもしませんし、お坊さんのように布教もしませんから、提言とかそういうのは不得意なように思うのです。

ただ、神道が守ってきた鎮守の森なりお社なりご社殿なり、そこにはすごい力がある。それをいかに、自分たちが持ってきたものはこんなに素晴らしいものがあって、これは世界の人たちが目を見張るようなものだということを、まず自分たちが自覚をしないと発信できないのではないかと思います。もともと発信するのが苦手なわけですから、よけいにね。先ほども言いましたが、お坊さんは布教をしなければいけないので、布教をします。お釈迦さんの時代から、

布教によって仏教が成り立つわけですから。でも神道はあまり布教をしませんよね。

ただそこに神様がおられて、それを守っていく。お寺とお宮ではそういう違いがあるので、発信力がやはり仏教ほどはないにしても、それを守ってきた現実の、事実があります。これをいかに広く知らしめていくかということが大事です。その倫理観を構築するとか、学問的にやるというのも、もちろんこれからは大事なのでしょうが、守ってきたものを自分たちで自覚して、それを人に分かりよくプレゼンできるような、今までとは違ってそういうところに、逆に、より今持っているものを、倫理観を高めていく力があるようには思います。いかがでしょうか。

石井　ありがとうございました。恐らく後で櫻井先生が、補足なり反論なりも含めてコメントいただけると思います。ありがとうございました。古沢先生に私からお伺いしたいのは、ちょうど現在が大きな文明の転換点にあると。人口をこれ以上増やすことは、地球環境が、今地球の存続、我々の存続自体も含めて、大きな問題があります。一方で人口の減少、増加はなかなか止まりません。ギガトンギャップも止まりません。人間の存在自体をどう考えるかということが重要だというお話をいただきました。これも大変失礼な質問なのかもしれませんが、國學院大学という神道系の大学にいらっしゃって、先生はそういう中で、あまり今のパネルでは説明されませんでしたが、やはりそれは神道的な環境倫理なり、神道的な世界観というものが果たす役割が大きいというふうに言うことができる部分があるのでしょうか。

古沢　自然科学の認識は、一種の客観知をどうしても重要視するというか、つまり自分というものと外との間をある意味で距離を置いて物事を見てしまいます。それが一つの立脚点として、より普遍性や客観性というかたちで世界を動かしていくというのでしょうか、そういう力として人間が対象に関わって動いていくことになるわけです。

ただ、それだけですと実は先ほど倫理という話しがありましたが、科学者の倫理もそうですが、人間自身の内部というか心の在り方というか、それ自体がだんだん空虚化し空洞化する傾向に陥りがちです。科学者などが対象を突き詰めていくと、本当に自然なりそこにある神秘性というのでしょうか、そこを見失い自分が見えなくなっていく側面が出てきます。逆に言うと、自分自身に戻ってくるある種宗教的な意識を持たざるを得ない面があるのです。残念ながら、普通の今の大学の中の仕組みというのは、客観的な理性や知性ばかりを教えていまして、自らを問い直すというところになかなか行きつくことができないのです。

実は神道なり、今日のような会合や、仏教も修験道もそうでしょうが、自然の中に神を見出そうとする営みであって、自然や事物の中に自らを投影しその中に感じられるものを内から見出していく試みです。神道の学びの場である國學院大學では、そうした視点を重視していると思います。しかし、一般の大学と同様に客観的な世界の中でコミットしていく学びということに、多少とも全体が傾いているのですが、それでも潜在的な可能性として日本の深層を私たちの足元で究明してきた、そういう学問所という点で意義深いと思います。

今日のテーマになっているような、人間と自然の関係性の原点にもう一度自らに立ち戻る一番重要な手がかりを、神道や他の宗教も含めてですが、いろいろなかたちで見出す試みとして、とても重要な拠点であるなと思います。そういう点を感じるようになってきたわけですが、ぜひ学生の皆さんや大学の関係者の中でも、そういう特徴をもっとアピールできるとよいのではないのでしょうか。それが自己満足に傾かないように、我々自身のあり方を真摯にとらえると共に、先ほど申しました世界全体が、だんだんはっきり言っておかしな世界のかたちに組み込まれていく中で、もう一度自らを問いなおす拠点として、國學院のあり方を見い出していくことが重要ではないかと考えています。

石井　ありがとうございます。古沢先生の、時間軸でも空間軸でも大変壮大なお話を伺って、そうだろうなというふうに思うのですが、具体的な事例を思い浮かべると、関わり方、あるいはそれを止めることの難しさというのを、身近に日頃から感じるのです。一つの事例ですが、もうすぐ電力の自由化が始まります。我々は安い電力を求めて、東京なら東電以外のところと契約する可能性があります。ところが小口の安い電力供給者というのは、コストパフォーマンスを考えて、火力発電をしなくてはいけないことになります。この場合には燃料が石炭になります。小さな火力発電で石炭をどんどん焚いて、40 ぐらいの火力発電が建設、稼働予定です。

そうすると、政府自体が定めている CO_2 削減も風前の灯火で危なくなります。ではそういうときに我々が安い電力会社と契約するのをやめるかというとどうなのでしょうか。我々の普段居心地の良い、皆さんのご家庭で暑ければ

エアコンをつけて涼んで、寒ければ暖房を焚いてという。あるいは交通網を整備して、道路を整備して、いろいろなことで使い勝手のいい便利な世界は、やはりエネルギーなどの問題があるから、不便や不快だけどがまんしようというときになったときに、本当に我々はそういう道を選択できるのでしょうか。そういうときに、神道に限りませんが、宗教的な環境倫理というものが説得力を持って我々に訴えるかということを考えると、私は難しいのではないかと思っているのです。古沢先生はいかがですか。

古沢　目の前にある利便性や、高価なもの、安いものということで言うと、やはり安いものに流れます。それが経済の原動力になってきました。ただ、非常に面白いというか、先ほどの国連の持続可能な開発目標の中に、いろいろ重要な目標が示されています。つまり我々の消費の仕方とか、企業で言えばものを生産する仕方が提起されています。たとえば、持続可能な消費というかたちで、消費のあり方をきちんと組み直そうとする動きですが、これは環境倫理と言ったらいいのか、もう少し基本的な生き方と言ったらいいのでしょうか、いわゆる環境を重視する消費者 (グリーンコンシューマー) というような在り方です。つまり自分が消費しているものはまわりまわって自分に戻ってくるわけですから、そういう倫理的、環境的な配慮です。

最近はエシカルコンシューマーとも呼ばれますが、エシックスというのは倫理です。社会的な責任や倫理を意識する消費者ということが、実は欧米での消費者教育の中で、あるいは普通の学校教育の中での大きな柱になって展開しています。それにちょうど呼応するかたちで、企業が社会的責任を CSR というかたちを掲げています。最近は CSV（共通価値の創造）という呼び方でも出てきて、社会的な共通の価値を創造していくというかたちで、だんだんと目先の便利さや安さということを超えていくような倫理性、地球倫理意識といった考え方をいろいろなかたちで作り出し始めてきています。

日本の中でも一部そういう動きがあり、今日いらっしゃっている方は皆さんそういうことを非常に強く感じられていると思うのですが、教育の中でもそういうことが言われ始めています。それがはたして本当に一般消費者の中の力になるかどうかという点は非常に問われる所ですが、流れとしてはだんだんと意識され始めています。目先の利己的な生き方自体が自らを苦しめる、あるいは世界をおかしくさせる、もう一度まわりまわって自らと世界や環境との関係性の中で共に共生していくという意識が、徐々に作り出され始めています。ここは、教育のあり方だけではなく、制度や仕組みが重要であり、先ほどの安さ・高さで言えば環境税というような仕組みや、あるいは再生エネルギーの固定価格買い取り制度などが大きな役割をはたします。

つまり枯渇して使ってしまえばなくなってしまうものや、地球環境をおかしくするようなものを出す行為には、そこに罰金を掛けるとか、いろいろな規制を掛ける取り組みです。これは個人の倫理意識とともに社会的な制度として仕組みを作る動きです。これは、社会的なコントロールの仕組みを我々が作り出せる力の現れのひとつです。つまり政策なり政治的な展開を実現していくプロセスが創り出せるかどうかで、もしかすると軌道修正できるかもしれないという期待を持っています。

石井　ありがとうございました。では、櫻井先生からパネラーの先生方に、質問があればお願いしたいと思います。

櫻井　そうですね。先ほど田中先生の方から、神道がこれまで守ってきた事実の発信という面が弱いのではないかと。実際に私はそのように感じます。ところが神職さん個々とお話をしていると、自分のところはこういうふうにやってきましたとか、そしてものすごく自負は持っていらっしゃるのですが、発信力が弱いという点は確かにおっしゃる通りです。私自身は神職ではなくて、神社仏閣にお供えをする立場の方なので、どちらかといえば神職的な発信はできないかもしれません。私どももこれまで神道が行ってきた、自然への取り組みや、あるいはその意味付けというものについては、できるだけお伝えするのですが。

ただお伝えするときに、意外と異なった文化や背景をお持ちの方々と共通の言葉を探すというのが、苦手になってしまっているのではないでしょうか。逆に自分たちにとって分かる言葉、私はそれを会話の世界の中にいつもいるので、対話の世界へ持っていく必要がありと認識しています。そういうときに、この環境という問題は本当にいろいろな立場から、そして人間にとって共通の問題としてお話できると思っています。

それで、最初に黒﨑先生がおっしゃっていた中で、アニミズム的な考え方。自然に、一木一草に神性を感じるとか、

よく神道はそのような一木一草を大切にしてきたと言っているのですが、私自身は本当に全ての森や、あるいは全ての木々とか、そういうあらゆるものに、感じるというのは個々の問題もあるのですが、大切にしてきたというよりは、やはりある程度のそれを判別しながら使う、使わないというのをやってきているのではないかと。ただし、どこまでそれを使っていったらよいのかという、範囲の枠組みの設定ができていないのです。そこになんらかの客観性の指標を導入することができるのかというのを、逆に見たいところではあるのです。

現実にいろいろな神社、自然が神道の関係でも減ってきたというのは、境内地の面積とかそういうものは換算できていて、これだけ減っていきますよというのは言えると思うのです。しかし、割りと神社というのは個別的でありますから個別の範囲で、自分のところにとって必要なのはどこまでかということ。それが共通の枠組みなり考え方を持てるかということだと思います。そういう面を倫理観で言えば、人間はどういう存在であるか、あるいは自然というのはどういう存在であるか、神社と人間との関係とはどういう有り方がふさわしいのかとして、何らかの価値観を示していくとき、アニミズムと言われる場合、確かに自然を大事にしているというようには思えるのですが、本当は境内林を神社維持のために伐採されていますので、その枠組というのはどうなのでしょうか。

それから、私は先ほど、神聖なものに対して手を触れないという考え方も本当はあったのだと申し上げましたが、これは田中先生の修験道などの、行者の方々が歩いてこられた道というのは、本来一般の者は歩いてはならないような気がするのです。それが開放されているという点が、逆に言えば破壊ということによってつながっているのではないでしょうか。それを閉じろとかいうわけではありませんが、これはもうそうした観念とともに保たれてきた、大事な道なのだという意識が薄れていくというのは、一般社会自体のがそういう認識を取り戻していかないと回復できないのか思うところです。

古沢先生から、今後の問題としていろいろと足元の手がかりというものを見出していくというお話等がありました。石井先生から環境税などの問題、現実に東京のお話などが出てきました。私などは近くの森の破壊に心が痛むことが多く、また草木を大事にしているのに、何で環境税を取られるのかと、逆にそれは都会の発想ではないのかと思ったりするのです。電気も大事に使っているのに、夜中見れば都会地は煌々と照っているではないかと。地方のひがみかもしれませんが、そういう観点から環境問題は見られているのだろうか、ということも少し考える必要はないのだろうかと思いましたので。一旦ここのあたりまでにしておきます。

石井　ありがとうございます。では黒﨑先生から順に、櫻井先生のコメントとリプライも含めて、今皆様方からいただいた質問も、全部ではありませんが先生方に一部お渡ししていますので、それも含めて少しご回答いただければと思います。

黒﨑　倫理学や倫理を問うというときによく線引き問題ということが言われます。ここからここまでは許されるけど、ここから先は許されないとか、そういったことが例えば生命倫理の問題などでもよく言われます。そういう意味では、先ほど櫻井先生がおっしゃったように、どこまで木を切っていいのか、許されるのかということが、逆に大きな命の全体性の中に生かされているという感覚の中で、曖昧になってしまって、それが発展して何でも許されるということになってしまうという、そういうことにもつながりかねないのです。線引きができないということの問題性というのが、やはりあるのかなというふうに思いました。これはやはり非常に難しい問題になってくるのが、田中先生が指摘された明治の宗教政策の問題などもそこに関わってくることです。それから、その面では恐らく近代宗教史の専門的な研究をされている方が、恐らくこの会場にもいらっしゃると思いますので、そういった面からいろいろお教えいただけるのかなというふうに思います。

私が実際に現場で目にした一つの例としては、津波で流されてしまった鎮守の森、神社を再建するかしないかということを、宗教法人格を持っている神社の場合はなんとかして再建しようという方向に動くのです。そうではない、本当に明治の神社整理政策の中で、明治 40 年代ぐらいに大きなお社に合祀されて、地元の方が守っていらっしゃる、そういう小さな祠の場合は、その方々が何か思い入れを持っていて、それを残そうという場合には修復されて残っているのですが、そこの持ち主の方の意思一つで、潰されてしまうという例もあったりします。そういう意味では、この場所は本当に神聖なところだから守っていこうという意識が、ある程度地域の中で共有されているか否かということが、非常に問題になっていくのかと思います。また、それを継承していくというのはやはり祭りであると思います。

そういったことが日々営まれているかというところに、一つの線引きの根拠というのが恐らく出てくるのかなというふうに思っています。

それから質問の件についてもよろしいですか。ご質問は、神社が避難所になったケースを私の方からお話をしましたが、寺院ではそういう事例があるのかないのかというお話でした。これは沢山あります。津波で流されてしまった寺院、これは神社もありますが、高台にあって無事だったお寺に沢山の人が避難して、そこで避難生活を送ったというケースは沢山あります。

一つの例を申し上げますと、先ほどもスライドが早すぎて見えなかったと思いますが、気仙沼市の紫神社のすぐ近くに、青龍寺という曹洞宗のお寺がありまして、そこにはやはり 100 名単位の地元の方が避難して、結構長期間に渡って避難生活が行われました。そのご住職の方は、もともと気仙沼市の中で防災に非常に熱心に取り組んでいらっしゃった方で、こういったことが起こりうると、お寺としてもその備えをしておこうということで準備されていました。そういう中で起こった津波だったので、いろいろ食料の問題とかはあったにしても、多くの方はそこに命を取り留めたというふうに聞いています。そういった面では、これは神社、お寺に限らず、あるいは他の宗教施設でも避難所になったケースというのはもちろんあるということです。以上です。

石井　ありがとうございました。では田中先生お願いいたします。特にもう一つ、自然環境文化推進機構の話しをいただいたのですが、短い時間でしたので、ぜひ具体的な取り組み等を付け加えてお話いただければと思います。

田中　質問の用紙にもそのようなのがきています。質問では、文化推進機構の設立について、行政の共同は具体的に進展したのでしょうか。政教分離により、どのように問題が発生していますか・・・という質問をいただいています。実はできたばかりで、この 5 月に発足をした、まだよちよち歩きの団体でして、これからどうなっていくかというのはまだぜんぜん見えていないのです。

一つは政教分離によって――環境省や国には環境に対する予算はあるのですが、このお金を、お寺とか神社は環境を守っていくために直接は使えないのです。先ほど法人格を持っているところは、自分でどうこうできるという話しもありましたが、ないところは地域でやるしかないのですが、法人を持っているところも、例えば文化財ですと文化庁から文化財修理に対しての予算が全修理額の 6 割とか、その収入の状態によって出るのですが、そういうものが環境関係のお金にはないのです。そういったことを含めて、日本における環境問題を考えたときに、神社やお寺の果たしてきた役割、あるいはそこが持っている価値観というのは、もっと積極的に関わっていくべきものがあるから、そこを何とかしようという目的で発足したわけです。

そういう意味では、具体的に進展したのでしょうかと問われると、とりあえず一回目のフォーラムを清水寺で開催できて、はじめの一歩は歩みだしました。ここから先というのはまだ今後の問題です。ただ環境省の審議官もおいでになっていて、ぜひ一緒にやれればいいとおっしゃっていたので、第一歩としては成功したなという状態です。

もう一つ質問がありました。吉野大峯の環境破壊の一番の原因は何でしょうか。また世界遺産登録と共に、修験道として環境汚染にどのような取り組みをされていますか。こういう質問がきているのですが、環境破壊の原因は沢山ありすぎて、どれが一番か分かりません。酸性雨の問題、あるいは鹿がものすごく増えた問題、中国からどんどん悪い空気が流れ込んでいる問題、さまざまな問題が想定されるので、地球温暖化も含めて、私には確定は出来ません。私の立場から言うと、先ほど申し上げたのですが、大峯の自然は靡八丁（なびきはつちょう）修験のもので、我々自身で守る土地だったんです。それが明治に取り上げられました。自分たちで守れないのです。これが一つは大きな原因ではないでしょうか。もちろん環境的な問題もありますが、その環境的な問題に立ち向かっていくためには、先ほどおっしゃいましたけれども、自分の法人の森であれば何とかできるという話しがありました。でも自分たちのものでないものは何ともできないわけですので、政教分離の先ほどの質問と合わせて考えると、ここの弊害が沢山あります。・・・というのが正直な現場での気持ちです。

それから、先ほど櫻井先生に少しお話をいただきましたが、聖なるものには触れてはいけないところもあるというお話。我々は、大峯奥駈道（おくがけみち）を行ずるとき、不思議なことに基本的に頂上を歩かないのです。奥駈道は頂上よりも少し下を通っているのです。あれはやはりそういう、もともと神道は山には入っていかなかったのですが、山に入っていくことによって宗教的な修行にしていくというのが、仏教というか、そういう神道ではない外来のものの思想と融合

していくものの、それでもやはり一番山頂というのは、どこまでも避けて通っているのです。そういう意味では一番コアなところは大事にしてきたという文化は、修験道にあっても続けてきたのではないでしょうか。

そういうところは誰も行ってはいけないのではないかという話しが今ありましたが、確かに世界遺産登録をすることによって、修験以外の人が入るようになりました。先ほども言いましたように、自分たちのものではないから自分たちで守れないので、世界遺産登録をしたのですが、実は私も心配していました。実際に登録されたその年の奥駈は今まで人に出会ったことがないようなところで、沢山な人に出会いました。確かにこれではかえって環境破壊が進むのではないかという危惧を持ったのでした。

ここからは私の体験なのですが、その登録年の奥駈の最終日、吉野から歩いて行くと、7日目ぐらいに玉置山に到着します。玉置山では「拝み返し」という場所があります。今まで歩いてきた峰々に向かって拝み返すのです。その拝み返しで拝んでいたときに、極めて私的な感想を持ちました。

世界遺産登録に手を挙げて、大峯奥駈道の保全をしようと思ったけれども、現実にはいろいろな人に山で出会って、逆にこれでは環境破壊が進めているではないか。そこをずっと気にしつつ歩いていて、最後、拝み返しで拝んでいるとき――それは山の神様に言われたのか、仏様に言われたのか、私の中で生まれてきたものか、定かではないのですが――「お前が手を挙げて、大峯の環境が破壊されたと思うのは、それはお前の思い上がりだ」という声を聞いたのです。「自然というのはおのずからあるもので、そこに人間がどう関わろうが、関わるまいが、そのことによって、もしこれが壊れていって、人間が壊していけば、それと共に自然も壊れていく」というのです。つまり、自分がしたことによって自然破壊を進めるのではないかという質問に対して、「それで破壊されるなら一緒に破壊される、壊れていくものだ」という声を心に聞いたときに、共生は共死を伴うというのは正にこのことであり、自分のおごりに気づかされた、自分の思い上がりだったなと痛切に感じたのです。地球全体の環境破壊の問題と、この件とはつながらないかもしれませんが、こと、大峯の世界遺産登録についてはそういう体験をしたということを申し上げておきたいと思います。

石井　ありがとうございました。では古沢先生お願いいたします。

古沢　いくつかの論点として、質問の中にこれからの宗教の役割というかあり方をどのように見るのかということで、多少補足します。やはり自然をどう見るのか、そして自分自身をどうとらえるのか、そこを問うということが宗教の本質ではないかなと思います。そのときに、宗教という言葉を使うのか、アニミズムというようなかたちで言った方がよいのか分かりませんが、自然の大切さとか、命の大切さというか、そこを感じ受けとめる、ここがまずは出発点だろうと思います。

ただ、そこでとどまらない側面というか、実はその奥に自然の持つ恐ろしさであったり、矛盾であったり、命の持っている素晴らしさと共に怖さというか、非情さという点にも踏み込まざるをえない所があります。人間自身そのものが、実は大切なものであるとともに、非常に恐ろしい存在でもあるということ、つまり矛盾に満ちた存在であるという、そこにまで入りこみ行きつかざるを得ないことがあり、ある意味では苦行を含みこみます。

ではそこを、どういうふうに折り合いをつけるのか。これは宗教に限りませんが、私たちに課されている原罪と言ったらいいのか、そういったものではないでしょうか。そこに答えていける、あるいは道を見つけていくという努力が、いろいろなかたちで求められているし、模索してきたのではないかなと思います。つまり宗教的な役割というか、意味というか、意義ということが、そこにあるのではないかなと思います。

実際にどのように矛盾に満ちたものを、折り合いをつけていくかというときに、これはいろいろな在り方や考え方があります。私たちに身近な考え方としては、まずは人間個人というのは一人で生きているわけではありませんので、先祖代々いろいろなかたちで生かされてきていることへの思いがさまざまな姿で現われます。あるいは、最近「伝統知」という言葉がいわれますが、自分の持っているものは過去の人たちの継承、いろいろな知恵を受けてあるわけですし、文化的な、あるいは潜在意識的な部分の中に蓄積されている土台の上に、今現在の姿があるのです。そこの過去とのつながりいうか、自分の根源を見出していく、その奥にある無限の連鎖系のようなものを、伝統的なものの知恵や力においてある意味で見出していくという、そういう方向性が一つあると思います。

ただ、そこに安住はできないのです。世の中はどんどん千変万化していきますし、万物は流転していきますので、

そこの中でまたどういうふうに折り合いをつけていくかという問題を抱え込みます。伝統や文化は固定的なものではなくて、日々改まっていくものです。そこで、その中で社会的にどういうふうに折り合いをつけていくかという、そこの努力が求められます。今の現代社会は、もっと非常に複雑化していますので、そうなってくると今度は制度的な仕組みをどこにどのように我々は作り出していくのか、ある種社会的な折り合いのつけ方、これを創り出していかないといけないのです。これは、国際的には先ほどの国際条約などがあるのですが、そういうことまで含んでの日々の営みにおいて、倫理的なものから宗教的なものまで、全部そういうものはつながってくるものだと考えています。そういったところまで視野に入れて、人のあり方を考えていく、あるいは社会のあり方を考えていくということが、今は求められているということではないかと思います。

一点だけ追加すると、環境税の話しに関連して、伊勢神宮を取り巻く海、川、里、山、森の循環系が注目されていますが､その循環のつながりを環境税の仕組みで補完する動きがあります。ここに神奈川県の人がいらっしゃったら、実は神奈川県では水道料金の中に水源環境税が組み込まれていて、山々の森林を守るためのお金が日々使っている水道水の中に、これは水源税と言ったりしますが、還元されていく仕組みがあるのです。水源から水を取るだけではなくて、それを維持し管理する機能を社会的に支えていくような、そういう仕組が生まれてきています。

日本でこれから電力料金が自由化されますが、ドイツとか欧州の環境意識がかなり高いところでは、日本でも一部ありますがグリーン電力という仕組みが機能しています。電力に色があるわけではないのですが、実は何とかそこに色を着けようとして工夫しています。すなわち、電力にはダークな電力と、グリーンな電力がありますよということを明示して、消費者にどんな発電所で電気が供給されているか、その意味をちゃんと知らせる仕組みです。似た動きは、すでに電気製品でもエコラベルというようなことが行われていますし、森林の木材にも今は、FSC という森林保全のラベルが付き始めています。海産物でもマリン・エコラベルというのも今出始めています。

そこには、私たちが今買っているものや消費し使用しているものの裏側には、命や地球に全部つながっている連鎖があり、そこをちゃんと見えるようなものにしていこうというような仕組みが生まれてきているのです。だんだんとそうした動きが広がることで、我々の日常的な行為に責任を感じとることができる仕組み、知恵のあり方を改めていく、いろいろな環境保全の仕組みが生み出され始めているというふうにみています。

石井　ありがとうございます。もう時間も過ぎておりますので、最後に櫻井先生、一言おまとめいただいて、このシンポジウムを終わらせていただきたいと思います。

櫻井　まとめるような力はないかと思いますが、二点だけお話したいと思います。一点は先ほど田中先生から、近代になって修験が廃れたという、制度的な問題の指摘がありました。これは修験だけではなくて、社寺の境内地も、明治初年に上知（あげち）という大きな影響があり、私たちは近代を迎えたとき、環境と一体的な世界を分離させ、混然的ななかから有用ものだけを吸い上げていくというか、そういう時代を経ていることをしっかり振り返っておく必要があると思っているのが一点です。

それからまとめにはなりませんが、私は講演の中で、何を原点にものを考えるかというときに、古事記や祝詞というものを出しました。テキストをそのまま読んでいけば、私のような解釈では少し行き過ぎた、踏み込みすぎた理解の仕方があるかもしれません。そういう意味では古典の客観的な解釈を踏まえつつ、それだけではなくて、その理解を今に、どういうふうに自分たちは、例えば環境という面で捉え直していくかという、そうした営為をこころがけておきたいと思います。足元でいろいろなかたちで、お互いに見出すことができると思いますので、それらを小さな気づきとして、大きなつながりとして、この地球のこれからの課題解決に立ち向かえたらいいなと思っています。以上です。

石井　ありがとうございました。基調講演をいただきました櫻井先生ありがとうございました。また短い時間ですが、濃い内容のご発表をいただきました先生方、ありがとうございました。失礼な質問にも関わらず真摯にお答えいただきまして、この点でもお礼を申し上げます。それでは司会の方へマイクをお返しいたします。よろしくお願いいたします。

閉 会 ご 挨 拶

RSE 副代表　岡本享二

本日はお忙しい中をお越しいただきまして、まことにありがとうございました。秋晴れにも恵まれて、盛況裏に終えることができました。朝、初めて国学院大学の門を通って、常盤松ホールのドアを開けようとしたら、「もっと日本を、もっと世界へ」という標語が張ってありました。てっきり今日のシンポジウムに合わせて張っていただけたのかなと思ったのですが、これは國學院大學のモットーなのですね。素晴らしいモットーですね。
RSE も「もっと日本を、もっと世界へ」の抱負を持っています。

さて、私の役目はシンポジウムのまとめということなのですが、恐れ多くて、後日発刊される報告書を参照していただきたく思います。それほど素晴らしいシンポジウムでした。深みのある、意義のあるシンポジウムであったのように感じました。諸先生方のお話を交えて、私の個人的に感じたことで、まとめに代えさせていただきたいと思います。

田中利典先生がイスラムの人たちをご案内されたときに、「世界は不公平だ。イスラムには砂漠を、日本には天国を与えた」と言われたと話されました。私にも同じような経験があります。ある西洋人が、「西洋では人間が動物と戦って食料を得なければならなかったが、日本は食料の方から飛び込んできていた」と言うのです。海に囲まれているので、魚介類は食べ放題で、森にも恵まれていて木の実なども豊富にありました。このような豊かな自然が、日本の豊潤な文化を育んできたというのです。例えば、日本の縄文文化は 1 万年続いたのですが、世界に 1 万年も持続した文化というのは希有な存在です。土器を世界で最初に作ったのも日本の縄文時代であったそうです。日本の土器が世界の中では 2,000 年も早かったということが、10 年ほど前に明らかになりました。それぐらい日本は恵まれた社会だったのです。争って食料を得る必要がないというのが大きな背景でした。生活に余裕があったのでしょう。そういう視点からも、これから縄文時代というのが、一つの大きな研究テーマになるかと思います。皆さまもご存じのように、江戸時代は文化も栄え、庶民の生活も素晴らしい循環型社会を実現していました。江戸時代の素晴らしさは近年各種の読みモノでも紹介されています。縄文時代に関してはイギリスの大英博物館をはじめとした欧米でも研究に熱心なようです。このように縄文時代の素晴らしさが見直され始めると、個人的には「縄文時代と江戸時代をつなぐ文化を知りたいな」と思うようになりました。本日の櫻井先生のご講演から、『古事記』『日本書紀』『今昔物語』のお話を踏まえて、縄文時代から江戸時代までのつながりが少し見えてきました。櫻井先生がおっしゃっていた自然、すなわち恵みへの畏敬の念、感謝だけではなくて畏敬の念が大事だということは、3.11、その他の災害からも身にしみて知ることができました。

黒﨑先生からは、防災と宗教、自然すなわち生態系を利用した防災が大事だとのお話に心を打たれました。20 年ぐらい前から自然資本主義という考えがアメリカを中心に広がっています。例えばニューヨークの水道局では、水質が悪くなったときに、当初は水の浄化施設の大きいものを造ろうとしたのですが、環境学者からの提案によって、水源そのものの環境を元に戻すことで水質を良くしたのです。浄化施設を造るという資本主義の考えだと、その施設は 10 年から 20 年たつと、また更新しないといけないのですが、自然を元に戻すということで、恒久的にきれいな水が得られるようになりました。黒﨑先生のご講演からは自然を活かした新たな発想が生まれる素地をいただきました。

田中利典先生からは、体で感じる、まさに修験道師さんの行動からいろいろなものを学ばせていただきました。特に政教分離の弊害であるとか、神社合祀令というのが明治時代にできましたが、そのときの南方熊楠があれだけ反対したというのが、先生のお話からなるほどと思われました。私は明日、朝早く相模湖近くの山（陣馬山）に登るのですが、本日のお話を聞いて、すごく明日が楽しみになってまいりました。体で感じる、行動を取ることを改めて肝に銘じようと思った次第です。

古沢先生のお話は、タイトルに、「エコロジー的世界観と人、自然、宇宙、曼荼羅」とありました。「何だろうな？」と思って興味深くお話を伺って、「これはすごい！」と思いました。先生には来年の春休みか夏休みに、15 回ぐらいの講座を社会人向けに開催していただきたいと思いました。先生は世界中の環境の、今、起こっていることを正に曼荼羅のように、わずか 20 分の中であれだけまとめてお話していただきました。古沢先生の網羅的なお話があったことで、シンポジウム全体がつながりのあるモノになったと思います。

このシンポジウムを通じて、皆さまもお感じになったと思うのですが、決して聞きっぱなしということはないですよね。これだけ実務を通して、いろいろと教えてくださった先生方のお話を聞いて、我々も何か行動しようと！　山に登っても感覚が違うだろうし各自が行っている、例えば研究や生活の中で、今日のお話しをいかに活かすかということで、本日のシンポジウムのまとめに代えたいと思います。

最後に、RSE（宗教と環境学者のエコイニシアティブ）は、6 回目のシンポジウムを行いましたが、7 回目は来年 12 月 10 日に龍谷大学で行うことをお知らせしておきます。また、当シンポポジウムの企画、登壇者とのコミュニケーション、会場の設営などの、裏方を担当された小笠原事務局長をご紹介します。だれよりも献身的に努力してくださったのが、小笠原事務局長です。こういうメンバーで RSE を運営しています。もし、参加者の皆さまで、宗教や環境を学んで、現在の社会に少しでも何か変化を起こそうという意思のある方には、是非、我々と一緒に参画していただけたらと思います。

本日は参加者の皆さま、ご登壇者の皆さま、本当にありがとうございました。今後とも RSE をよろしくお願いいたします。

The Religious and Scholarly Eco-Initiative（RSE）
6th Public Symposium on Religion and the Environment

Awe and Gratitude Towards Blessings: The Effectiveness of Environmental Ethics Derived from Shinto

November 28, 2015
Kokugakuin University, Japan

Awe and Gratitude Towards Blessings: The Effectiveness of Environmental Ethics Derived from Shinto

SAKURAI Haruo（Kogakkan University, Faculty of Letters, Distinguished Professor）

While interest in environmental issues on a global scale has been growing, there is now an awareness about the crisis currently facing us with the worsening of the environment, and a wide variety of discussions and initiatives have attempted to address the problems. Questions have been raised about what role there is for religion, and what potential there is for religious research and religious researchers to contribute to these efforts at solving environmental issues.

Shinto is one of the religious traditions in Japan, and a practice within it that has long played a role in protecting forests is the naming of sacred groves or forests as "Chinju no mori," something which tells us about the value placed on belief and having gratitutde towards the blessings of nature. However, after the Great East Japan Earthquake and the nuclear power accident, people have gradually realized the necessity of giving deeper consideration to the true meaning of nature's blessings. It has been said that Shinto has not logically expressed a unified view of environmental ethics, but I think that there is a sensibility in Shinto that can lead us to a grasping of the true meaning of nature's blessings through understanding the two aspects of "fear" and "gratitude." My aim is to show how this is an important concept for dealing with environmental problems.

Panel Presentation #1: Sacred Shrine Forest as a Base of Disaster Risk Reduction: From Evacuation Shelter to Renewable Energy Plant

KUROSAKI Hiroyuki（Prof. of Kokugakuin University）

From the experience of the Great East Japan Earthquake occurred on 11 March 2011, we learned that shrines and sacred forests functioned as bases of disaster risk reduction. There are religious facilities such as Shinto shrines and Buddhist temples on the hills near the coast, where residents took refuge. The festivals and folk performance held by sufferers with assistance of volunteers supported their resilience. Some shrines and forests became places of memorial requiem.

For that reason, one can expect a shrine and sacred forest as a base of Ecosystem based Disaster Risk Reduction (Eco-DRR). Such expectation can be found in the movement to introduce renewable energy facilities to sacred forests.

We must verify these efforts in order to construct environment ethics based on Shinto.

Panel Presentation #2: There is No Good or Evil in Nature: From a Standpoint of Shugen-do

TANAKA Riten（Choro of Sohonzan Kinpusen-ji Temple, Kinpusen Shugen Main Sect）

Shugen-do has three features: 1) a mountain religion, religion of mountain priests (yamabushi), 2) a practical religion beyond denominations, 3) a polytheistic religion as syncretism of Shinto and

Buddhism. The “Sacred Sites and Pilgrimage Routes in the Kii Mountain Range” was registered as a UNESCO World Heritage site as a result of activities I had engaged in. Its purpose is to remind people of Shugen-do’s faith so as to protect nature in Yoshino and Omine, which is a dojo, a training hall, from rapid destruction. It is necessary from now on to tackle environmental issues with the cooperation of the Japanese administration, and temples and shrines, and reevaluate the values of the Japanese people who found Shinto and Buddhist deities through life and death in nature which has neither good nor evil in bringing both blessings and threats. Shugen-do will be of great assistance to that purpose.

Panel Presentation #3: A question about the human civilization and the ecological view of the world as “Mandala”, people, nature and the universe ---- from the point of view of "coexistence and harmony."

FURUSAWA Koyu（Prof. of Kokugakuin Uiniversity）

Among the eternal years, human beings have sought a stable system in order to overcome the fluctuation of its existence. This stable system, the historical formation of the religious view of the world is in, been sought as the formation of the ethics and the legal system.

In the modern and contemporary society, the fusion of the idea that are holistic ecological view of the world (integrated knowledge) and scientific and technical intelligence (analytical knowledge). It has been exploring for a long time as a broad sense of "human, nature and the universe" Mandala world.

The characteristics of modern human beings, there is a tendency that has been towards the eye (directivity) just outside, there is a situation that is not undergone sufficient development for the ability to reflect on their own inside system.

As a historical turning point of the human development related with its surviving, I would like to overview and consider about in the future perspective from the point of view of "coexistence and harmony".

編集・発行：宗教・研究者エコイニシアティブ 事務局